魔法少年マジカルせつな

黒桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少年マジカルせつな

【Ｎコード】
Ｎ７７７１Ｗ

【作者名】
黒桜

【あらすじ】
青山刹那は前世の記憶持った転生者である。
その上、神様？から世界を救えとか言われる始末、
一緒に別世界から転生させられた世界を救う者の本命である近衛木乃香と一緒にリリカルなのはの世界を救えるか？
＊近衛木乃香はネギまの木乃香で魔法世界に行く際にこっちに引っ張られてきた形になります。
＊青山刹那はネギまの桜咲刹那の異世界同位体ですが。神鳴流が使えるぐらいで思考とかは似てません、しかもあんまり使いませんし

前世がオタクだった為あっちこっちでどっかで聞いたことあるセリフがとびだしますｗｗ刹那のバリアジャケットは騎士タイプもといガンダム型になっています。ガンダムな武装を魔法で擬似再現している形になっています。

＊本作品は作者の初公開作品でまだ未熟な作者の作品です。ここが変だ！！なんてのがありましたらおしえていただけるとありがたいです。一応、設定関係はしっかり作ったので問題ないはずですが文章力や展開等で判りづらい箇所は指摘していただければ、本文の修正や前書き、後書きでの補足させていただきます。

＊このＳＳにはなのはを主軸に、（未プレイの）とらハにネギまと型月とガンダムにの設定なども使われていますのでそちらも詳しいほうがより楽しめるかと

＊この話はチート成分を含んでいます。苦手な方はＢａｃｋｓｐａｃｅを押して下さい。

第０１話　さよならメモリーズ（前書き）

無印からのスタートです。
各話を２話前後で進めて無印完了時にプロローグ併せて３０話を年内（Ｈ２３）で完成できればと思ってます。

第０１話　さよならメモリーズ

（あ～これは流石に死んだかな。）

こんな状況になったのは女の子が轢かれそうになっていて、それを助ける為に飛び出し、女の子は歩道に放り投げたから。目の前には大型トラックが迫っている。

（まぁ、女の子を助けて死ぬならウチにも価値があったかな）

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

「知らない天……って天井が見えないじゃないか」

体を起こし、周りを見渡すと蒼原だった。

（いやいや、草が蒼ってどうよ？綺麗だけど）

周囲には誰もいないが、こちらを見ている気配がある。

「誰かいますか～」

すると近くの地面が光り、人が現れる。

「すまん、待たせたか」

現れた人はすごく中性的で、年も子供なのか年寄りなのかもわからず、
良い人にも悪い人にも見える。
声は死神の様なのに口調が仮面の人っぽい。

統合すると、すごく胡散臭い人。

「ふむ、そちらに合わせたつもりだったがこれでは胡散臭く見えるのか」

「勝手に心を読まないでください、プライバシーの侵害でセクハラです」

通用しない様な戯言を吐き出すが鼻で嗤われる。

「其の様な事を言うなら、顔に出さん事だな。それよりも自己紹介をしようじゃないか」

「はぁ、ウチの名前は青山（あおやま）　刹那（せつな）、トラックに轢かれたはずなんだが、気が付いたらココに居たんだけど、ココって何処？」

地球じゃないっぽいのはわかるが、なら何故ココにいるのか。
ネットでよく見る二次創作ならミスで死んじゃったから異世界転生とかだけど、実際に神様がそんな事するはず無いし。

「此処は天上界だな。わかりやすく言うなら天国で問題ない。それでお前が助けた娘は今日死ぬ運命だったのだが、お前が助け、代わりに死んだのでその分寿命が伸びてしまったのだ」

「それは重々。せっかく助けたのにすぐに死んじゃ勿体無い」

「娘は死後、転生をしてもらいその世界を救ってもらう予定だったのだが、仕方なしに別の世界のその娘に死んでもらい転生する事に決まったのだが転生させた後に重大な事実に気付いてしまったのだ」

（ウチがした事はバタフライ効果で別の人が死んだだけになっちまうのか）

「代わりの娘の世界にはない話だったのだ、本来なら知っている娘を送るはずだった、これでは計画が狂ってしまうと。そこで物語も知っているお前も送り、救ってもらうと考えた訳だ」

「はぁ拒否する気はないけどウチはそんな強くないぞ、単純な力ならともかく剣術とかは従姉妹に全然敵わないし」

「なに、そのままは行かさんよ。便利なアイテムぐらいはやろう」

「っとその前に、どんな世界には行かされるんだ？それによって便利なアイテムも変わってくるだろ」

「お前がいた世界にあった物語で魔法少女リリカルなのはの世界だ、それで魔改造可能なインテリジェンスデバイスをやろうと考えていたのだが」

萎えたｏｒｚ

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされたくないです」

「なんじゃ、女の子が怖いんか？惚れた弱みにできる様に愛の黒子でもつけるか？」

刹那は項垂れる。

「余計にダメだろ、それ。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩフラグ乱立とか勘弁してくれ。魔力ＥＸの方が何倍も有益じゃん」

「なら、とりあえず肉体的には第５次聖杯戦争のセイバーに道具作成までつけてやるぞ」

具体的にはこんなもんじゃと、言われると頭の中にステータスが浮かぶ。

筋力：Ｂ（４７９３）
耐久：Ａ（５０４８）
敏捷：Ａ（５２５７）
魔力：Ａ（５６５９）
幸運：Ａ（５２５３）
宝具：Ａ＋＋（次元振を引き起こす程の威力）
対魔力：Ａ（魔力によるダメージを魔力の５０％分軽減）
騎乗：Ｂ（魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなす）
道具作成：Ａ（材料さえあれば、望む道具を作成できる）
直感：Ａ（第六感はもはや未来予知に近い。また、視覚・聴覚への妨害を半減させる効果を持つ）
魔力放出：Ａ（武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる）
カリスマ：Ｂ（国を率いるに十分な度量）

「魔導士ランクＳＳＳで平均３０００最高値が５０００ぐらいじゃ、例をあげるならランクＳ＋のなのはのステータスで一番高い魔力が

B（４２６３）じゃな」

「ちょい待て、宝具ってなんだよエクスカリバーでもくれるのかよ」

名剣だから触って見たいとは思うが西洋剣は専門外だ。

「いや、お主は根源に穿、属性がバリスタ。それに日本の剣術を収めておるからな、それに合った武装を用意しておる。そろそろ時間も押している、行ってもらおう」

胡散臭い人がそう言い終わると足元が光だす。

「ちゃんと返事を聞きやがれー」

そう言いながら気を失う。

第０１話　さよならメモリーズ（後書き）

黒「はじめまして、皆さん。作者の黒桜です」

神「この第１話にしか出てこない予定のアレイスタークロウリーだ」

黒「とりあえず書き始めましたが・・・原作第１話の部分も書き終わってなかったりｏｒｚ

神「かなりの勇み足だな、計画を変更するか？」

黒「今のところ3日に1本仕上げれば平気なはず！！だが問題がある」

神「なにが問題なのだ？問題がわかっているなら修正すればいいだけであろう」

黒「実はな、なのはの幼少期のシーンがどこで使われていたかが思い出せない、それのおかげでシーンが書きづらい。まぁ好き勝手すればいいかと思わなくもないが・・・わかる人教えてｏｒｚ」

神「まぁ、がんばれ。それはともかくそろそろ次回予告しなくていいのか？」

黒「あ、そうだった。時間もいい頃合？になってきたし、そこだけ刹那にしてもらいますかｗｗ」

刹「は？ウチのあとがきのセリフそんだけ？」

黒「うん」

刹「はー・・

ウチ、青山刹那。ごくごく普通の平凡な剣術道場師範代だったはずなんですが、
なんの因果か運命か神様に転生させられちゃいました。
待ち受けるのはどんな運命か？
あとまだ名前も聞いていないもう一人の転生者はどんな人なのでしょうか？
次回　魔法少年リリカルせつな　第２話　夜が明けるよ
リリカ　ってこんなセリフ言わせんじゃねーよ！！

＊２０１１／１０／１１　刹那のセリフの言い回し変更
変更前　トラックに轢かれたはずなんだけど、気が付いたらココに居たんだけど
変更後　トラックに轢かれたはずなんだが、気が付いたらココに居たんだけど

第０２話　夜が明けるよ（前書き）

とりあえず、プロローグ２と言う処。
プロローグは４話迄で考えています。
もう一人の転生者も決定、サブヒロインと言うのは自分の中で決定済み。
現状で想定している唯一のルートは黒化ルートのみ。

第０２話　夜が明けるよ

そんな事あり、青山刹那は転生した。
生まれは前世と同じで青山の性で名前も刹那、両親も一緒。
親の都合？で近衛って家に居候してたり、年下だった従姉妹が年上になってたり差がある。
何よりも一番の差は木乃香と言う一緒に育てられた娘だ。
その娘がね、助けたから女の子にそっくりなんだよ。

「な～せっちゃん、どうしたん」

「考え事、このちゃんさ、生まれる前の事覚えてる？」

覚えていてもたいした事は覚えてないだろうな、助けた女の子と同じ年だったら５～６才ぐらいだろうし。

「覚えとるよ～せっちゃん女の子やったよ～」

いや、それは別の人の話だろうウチは前世でも男だ。

「じゃあ、証拠は？」

意地汚い質問だが、仮にもう一人の転生者だったとしても木乃香は助けられたら助けるその程度にしか考えていないし。

「プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ（アールデスカット）」

指先に火が点く。

「何故に西洋魔術、このちゃんの家は呪術協会の系列だろ」

「前世で教えてもらったんや、みんな元気にしとるかな～」

5～6才の小さい娘に魔術なんか教えるか？違和感があるな。

「ちなみに幾つで死んだの？」

「14やで。みんなで魔法世界（ムンドゥス・マギクス）行った直後にネギ君がイロイロいうてな気が付いたら胸を撃ち抜かれてな、そしたら神様の前やった」

魔法世界（ムンドゥス・マギクス）ってなんだ？別世界とは時間の流れが違ったのか？この娘が前世にいた呪術協会宗家近衛木乃香と同じ人物なら確か15才年下のはず。

まぁ、異世界と比べれば些細な差とも言えなくはないが・・・

「ここにいたのね、二人とも」

声をかけてきたのは今生の母上だった。

「実はね、お仕事でお引越ししないといけなくなったの」

「ウチも一緒にいくの？どこに行くの？」

多少、可愛らしく年相応に聞き返すが、次に喋ったのは木乃香だった。

「え、せっちゃんお引越しするの？」

それはもう保護欲を楚々られるちょっと涙を溜めた声でした。

うん、女になってる程の名女優ぶりでした。

「大丈夫よ、このちゃんも一緒だからね。でも、このちゃんのお父さん達はこれないんだけど大丈夫？」

「うん、おとーさまといっしょよりもせっちゃんと一緒にいたい」

おいおい、そこの草葉の陰で詠春さんが涙目になってるぞ。
しかもこっちと目があったら真面目に殺気を放ってるんだけど、あのおっさん。

「あー可愛いな。もう刹那の嫁に来ちゃいなさい」

「はい！！」

このバカ親と天然木乃香とその親をどうにかしてくれ。

「それで母上、どこに引っ越すのですか？」

「海鳴って街よ」

第０２話　夜が明けるよ（後書き）

黒「と言う訳でもう一人の転生者も出て来ました～パチパチ」

刹「どうして、この娘になったんだ？接点が見出せないのだが」

木「ややな～せっちゃん、前世から仲良しやん」

刹「身に覚えがない上に、どう見てもＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩフラグが増えただけにしか思えないんだが」

黒「そこは安心？していいよ。ハーレムなんてさせないから。そもそもこのＳＳを書き始めた理由がなのはオンリールートのＳＳがないって処からだし。　恭也や士郎と会話（肉体言語）するぐらいだよ」

刹「世界は歪んでいる！トランザム」

閑話休題（それはあに置いといて）

木「では次回予告を～」

木「せっちゃん、せっちゃん。鳴海市ってどんな処なん？」

刹「このちゃん、母上にもきいてたよね。まぁしかたないか、鳴海市は海と山に囲まれてバス一本でネズミの夢の国にまで行けるしね～」

木「ネズミの夢の国も？都会なんやね」

刹「だから、シーズンになると人が多くなったりするんだよ、それでどこに行きたいんだよ」

木「それでな、その～」

刹「はぁ？ＵＳＪ」

第０３話　教えてあげる（前書き）

感想お待ちしております。
書き方が変な所とかもあるかと思いますが、なが～い目でみてください。

第０３話　教えてあげる

いろいろ考えました。
時間は３年程あったしその中で思いついたのは紫の上計画！！
可愛く好みの姿に育つのがわかっているのなら、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩする前にちゃんとお話する娘に矯正すれば良いという。
根本的な処で相手としっかり話をして、相手の希望を聞いてそれに沿う様に成長させればと。

閑話休題（それはさておき）

鳴海市に来ました。
何をするにしても早期の出逢いは必須と思い、土日は公園に行くという事を１年も前から仕込んで居たおかげで１人で外にちゃっちゃかでてきました。

問題は２点程。
どの公園なのか、それに時期も小学校に入る前っぽいという事しかわからない。

とは言うものの動かないという下策は避けたいから、それらしい公園をコンビニで地元紙を立ち読みで情報収集し、八束神社と翠屋の近くにある公園をピックアップしてれっつ突撃。

見事に一件目でヒットか？
ツインテールの女の子が泣いていたので、これ幸いにと話しかける。

「どうしたの？なんで泣いてるの？」

「おとう…さんが…ケガして……おにぃちゃんは…どうじょうにずっといるし……おかーさんとおねえちゃんはおみせから…ぜんぜんかえってこないの…」

恭也！家族全無視してなにやってるんだよ？
そんなバカ兄貴は置いといて、フォローしとかないとな。

「お母さんとお姉ちゃんは、お父さんがお仕事できなくなったからその分頑張ってるんだよ。だから、帰ってきたら”おつかれさま”って言いながら抱きついてあげたらすっごい喜んでくれるよ。喜んで元気１００倍になったら、お店からも早く帰れる様になるからお話したりもできる様になるよ」

涙目ながらも「ほぇ～」と洩らしながらこっちを見る。

「ウチの名前は刹那、青山刹那。君の名前は？」

「あたし、高町なのは。えーとせつなクン？でいいの？」

「よろしくね、なのちゃん。とりあえず行こ」

手を引っ張って立たせながら、答える。

「え、え、どこ行くの？」

「ダメダメな事をしているお兄さんとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしに」

それはそうと、もしかしてウチの家の引越しって士郎さんが引退するから、その穴埋めで来たんじゃないかと。
じゃないと来てそうそうこのイベントに当たらなかっただろうし。

家に帰ってから、事実関係を聞いてみるか。

「おにいちゃんのところ？な、なんで」

「お兄さんがバカな事をしているからなのちゃんが泣いてたんでしょ、

だからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしに行くの」

妹は店の手伝いをしてるのに兄貴がなにしてるんだか、一度、叩き直しておかないと。

将来、父上と母上と一緒に活動する可能性があるなら尚更。

なのちゃんの家までいろいろ話をしながら移動。

兄貴以外は家族愛に恵まれる環境みたいだ、兄貴だけは剣術家としての士郎さんを敬愛してたみたいだ。

というより、小学生の時点で家族愛より敬愛してる様に見えるってどうよ？謎だ。

美由紀さんはやはり料理が下手らしい、士郎さん程の人物が白眼でテーブルに倒れこんだらしい。

どうやったらそんな味付けになるのか教えて欲しい。

両親ｰ ｓはバカップルで家族みんなにやさしいみたいだ。

兄貴だけ変な気がするのは何でだ？

そんなこんなで高町家に到着しました～

道場の方からテンポの狂った踏み込みの音が聞こえてくるが・・

神明流なら初段クラスにも勝てない様な状態みたいだな。

ウチの敵にはならないだろう。

道場の扉を勢いよく開けると、小太刀サイズの木刀が飛んできた。
キャッチをするが、怒ゲージが一気にＭＡＸまで上がっちゃいました。

「ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか。なのちゃん、飲み物用意してもらっていい？」

「う、うん。とってくる」

怒気がもれてしまったせいでなのちゃんを怖がらせてしまったよ。
まぁ十二分に発散する相手がいるのでよしとするか。

結果は、十二分にＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩしてからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましたよ。
前世の神明流の技術に神様にもらった身体能力のおかげでそこら辺の裏の人間にも負けない程度の実力持ちだから、普通の鍛え方の相手には圧倒ですよ。
そりゃあ、こっちの攻撃を受け止めようとしても斬岩剣で木刀が真っ二つ。
距離をとっても防御の木刀を無視して当たる斬空閃　弐の太刀。
プライドなんてのはＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩで粉々に砕いて、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩで精根を叩き直して、家族にやさしいお兄ちゃんにできたと思う。
これでなのちゃんも家で寂しい思いをしなくなるだろう。

そのあと、なのちゃんの持ってきたジュースをのんびり話をしながら飲んで、夕暮れになったので明日も会う約束をして帰宅。
このちゃんに文句を言われたが心地良い疲労（笑）の為にご飯を食べ終わったあとにすぐ眠ってしまった。

朝起きたら、このちゃんがべったりくっついていたのは別のお話。

第０３話　教えてあげる（後書き）

木「せっちゃんから知らない女の子の匂いがした」

刹「・・・・作者、このちゃんルートは予定にはないんじゃなかったのか」

黒「ん、フェイトが出るまでは我慢してくれ。木乃香の担当はフェイトの予定だから」

木「せっちゃんはウチのもんやから、ウチと一緒にいないといけないんやで」

刹「おい、それって６年は我慢しろって事か？そうなのか？」

な「ねぇせつなクン、女の子が嫌がる事しちゃダメだよ」

刹「なのちゃん！？好かれる事も嫌がる事もやった記憶にないんだけど」

な「そうなの？じゃあちゃんとお話をして、聞かないと。それにあたしも紹介して欲しいな」

黒「じゃあ次回予告を」

な「ねぇ、せつなクンの剣術ってどこでならったの？なにやってるかさっぱりわからないんだけど」

刹「あれは京都神鳴流だよ」

木「せっちゃんは神明流が使えて、魔法先生ぐらいの身体能力持っ

ててオマケに退魔術もつかえるんやで」
刹「まぁ、ウチは家業の手伝いできるぐらい得意だね、退魔術も三週間で覚えたし」
な「ほぇ～その頭、その頭が人より良くできてるんだね～」
刹「あ～もう可愛いなもうなのちゃん」

第０４話　君の知らない物語（前書き）

とりあえず今回でプロローグ＆ａｍｐ；幼少編終了です。
次回、やっと淫獣が現れますｗｗ
バットエンド変わりに言っただけのはずの黒化ルートの入口が見え始めてる気がするのは何でだろう？

第０４話　君の知らない物語

次の日、ウチは友達ができたから紹介すると言いこのちゃんを連れて公園に。
なのちゃんが現れた瞬間に、このちゃんに睨まれました。

ＮＡ★ＺＥ★ＤＡ！

「せつなクン、となりのコだ～れ？」

なのちゃんは癒しのオーラで嬉しいね～
二人に黒化されると手も足も出ないからな。

「今朝言った友達の高町なのはちゃん、このちゃん。自己紹介」

「ウチ、近衛木乃香。せっちゃんの幼なじみや」

「あれ、でも昨日、引越してきたって」

ああ、と頷きながらなのちゃんに説明する、このちゃんの親がバカ親だからウチの親が一緒に面倒をみてて、今回の引越しにも連れてきちゃったと。
あれ？ウチの親もバカ親だから意味が無くね？と思いつつも気にせずに説明する。

閑話休題（それはさておき）

取り合えず今日は翠屋訪問予定です。
なのちゃんには伝えていません。

5分ぐらいちゃんと話せればいいのと、前持って伝えると何も話せなくなりそうだし。

幸い、１０分そこらでなのちゃんとこのちゃんも仲良くなったし、人気のある喫茶店という事で誘い、手を繋いでレッツゴー

という訳で翠屋到着。

なのちゃんの様子が近くになってから優れないけど、ちゃんと言わないと伝わらないと説得して中に入る。

ん、お金はあるのかって、近衛家の妖怪ぬらりひょんに実力を見せて、親には内緒で幾つか仕事をさせてもらったから財布には諭吉さんが数枚いるから平気。

「いらっしゃいませ、ってなのは！？」

１０才ぐらいの女の子がなのちゃんに気付いて近付いてくる。
美由紀さんか、考えてみればこのタイミングで１６才の姿で出てきたらおかしいもんな。

店内は2時と一番空いている時間帯のおかげで他にお客さんは一組しかいなかったが・・・・
その一組は父上と母上だった、なぜ此処にいる？

「やっと来たわね、刹那。ダメじゃない、公園はいいって言ったけど勝手にあっちこっちに行っちゃ」

全く持って正論なんだが、なぜ此処に居るのかを教えて欲しい。

「まぁ女の子の為にじゃ、あんまり怒れないからこのぐらいにしといてあげる」

そう言いつつ、結構な力で頭にグリグリとゲンコツを押し付ける。

中々に痛い。少なくとも恭也の力よりも強い。

「どうかしましたか？あら、なのは」

母上が席を立つから奥にいた桃子さんも出てくる。

ってか若くないか？２２才の母上と年の差を感じないんだが。

「とりあえず、ケーキセット３つください。チーズケーキとチョコケーキとショートケーキ、飲み物はオレンジジュースで。あとなのちゃんとお話してください」

ちょっとたどたどしくもしっかりと言うと。

「ボクはなのはのお友達？」

と桃子さんが聞いてきたので。

「はい、ウチは青山刹那といいます。こっちは近衛木乃香です」

と元気良く返してやったぜ、これでつかみはおｋ

小学生ぐらいまでは一日で友達になるのなんて普通だからな、ここまで言い切れば疑問に思わないだろ。

そして、もう一度言っておく。

「なのちゃんと話をしてください」
なのちゃんはウチの服の袖を掴みながらも、しっかりと桃子さんの顔を見つめている。
「わかったわ、美由紀ちょっとお店を閉めてもらえる？」
「え、お母さん！？」
「ちょっと早めの休憩よ、せっかくなのはもいるんだし」
「ほら、私達の分のお茶も用意して」
美由紀さんを入口に押して桃子さんがバックスペースに行く。
「大丈夫、なのちゃん？」
「うん、頑張る」
良い笑顔で返事をするもんだから思わず頭をナデナデしてしまう。
「はにゃ～」
「せっちゃん、ウチも」
と、このちゃんも言ってくるから、撫でる。
父上から視線を感じつつも無視して撫で回す。
少ししたら桃子さんがちょっとだけニヤニヤしながら、声を掛けてきた。

「さ、準備もできたし、お茶にしましょう」

自然と青山家と高町家で別れて座る。
まぁ隣のテーブルだから簡単に声をかけれるからフォローもできる。
この右手にくっついているこのちゃんが邪魔で動きにくい&ケーキを食べにくい。
まぁ両利きだから、気にせずに左手で食べるとこのちゃんがケーキの乗ったフォークを片手に涙目になってる。
”あーん”なんてさせた事ないのにできると思ってるこのちゃんに乾杯（笑）

高町家もちゃんと会話できてるし心配だった仲直りじゃないけど相互理解もできてるみたいだし。

「それで、昨日のは刹那君に教えてもらったの？」

「うん」

と元気良く頷くが。

「なのちゃん、昨日のってなに？」

「帰ったら、なのはがおかあさんに抱きついておつかれさまって言うからびっくりしたわよ」

聞いてみたら桃子さんはそれだけでなのはがさみしがってるのに気が付いたけど、誰の入知恵なのかが気になったらしい。

「うん、ウチが言ったんだよ。なのちゃんが元気がなかったみたい

だから」

「にゃはは、恥ずかしいよ、せつなクン」

それからは楽しく会話をして、家までなのちゃんを送って行って。

母上からの説教で地獄をみたのは別の話。

第０４話　君の知らない物語（後書き）

黒「これにて幼少編完了、次回から本編開始」

刹「所々、キンクリされてるんだけど、それはどうしてなんだ？」

黒「作者の技量不足です。キンクリせずにしようとすると会話と説明及び刹那の内心部分のバランスがすごい偏っちゃって、それのバランス取ろうとしたらこんなんなっちゃった」

な「あたしはこの世界の魔法少女になる！」

木「ウチは魔法少女に、なる！」

黒「次回にはそうなるけど急に出てきて、神や海賊王になるみたいに言わなくても・・・」

刹「この世界は歪んでいる！」

黒「セイエイになるな！お前の機体はアベンジャーの称号持ちだｗｗ」

刹「は？ウチの機体？そんなの話に一回も出てないじゃないか」

黒「だって機会がなかったんだもん」

な「だもんって・・・可愛くないの」

黒「絶望した、歪んでいるこの世界に絶望した」

刹「ティエリアになるな！」

黒「オレだって、お前らの年の頃は可愛かったんだぞ。そりゃー女の子と間違われるぐらいには」

木「痛い子やね、黒桜さんって」

黒「いいんだ、もうｏｒｚ　　さっさと次回予告にいこう」

それは、出逢いの物語

四人の子供達が巡り逢いが、運命のはじまり

異なる世界で暮らす、四人の子供達を出逢わせた事件

禁忌（ロストロギア）の遺産・ジュエルシード

譲れない思いを胸に

護る力、撃ち抜く力「魔法」をその手に

少女たちは、迷いながらも

心に決めた、想いを貫く

刹「ただ、自分の世界を幸せにしたいんだ」

刹「君もウチの世界にいるから幸せになってほしいんだ」

想いで運命を紡ぐ

な「目的があるなら、ぶつかりあうのは仕方ないかもしれない・・・・」
な「だけど、なにもわからないまま戦ったりするのは、嫌だ！」

問いかけたい言葉

フ「わたしがここで負けたら・・・母さんを、助けてあげられない・・・！」

叶えたい願い

木「ウチはみんなを護りたいんや、誰にも傷付いて欲しくないんや」

全てを包み癒す

哀しき運命と、勇気の誓い
四つの想いが、軌跡を描き

四人の子供達は、空を舞う

な「友達に・・・なりたいんだ」
刹「幸せになってほしいんだ」
木「護るから一緒にいさせてや」

人物紹介（前書き）

今回は本編に入る前の各種設定公開。
設定なんてどうでもいいんだよなんて人は飛ばしても問題ないです。
刹那の使うＭＳもといバリアジャケットなんかもちゃんとなのはの世界観で問題ない様にがんばって構成したので読むまでいかなくても簡単に目を通しといていただけると嬉しいです。

人物紹介

青山　刹那
根源：穿つ
属性：バリスタ
筋力：Ｃ（３５９４）
耐久：Ｂ（４２７５）
敏捷：Ｂ（４９３７）
魔力：Ｂ（４５６８）
幸運：Ａ（５２５３）
宝具：Ａ＋＋（次元振を引き起こす程の威力）
対魔力：Ａ（魔力によるダメージを魔力の５０％分軽減）
騎乗：Ｂ（魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなす）
道具作成：Ａ（材料さえあれば、望む道具を作成できる）
直感：Ａ（第六感はもはや未来予知に近い。また、視覚・聴覚への妨害を半減させる効果を持つ）
カリスマ：Ｂ（国を率いるに十分な度量）
魔力放出：Ａ（武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる）
気放出：Ｂ（武器・自身の肉体に気力を帯びさせ、能力を向上させれる。また照射する事により攻撃も可能）
霊力運用：Ｂ（魔力、気を霊力と効率よく高濃度に合成でき、能力値を大きく上げる事ができる）

デバイス
インテリジェントデバイス：ショコラ
ブーストアームドデバイス：バロン
ブーストインテリジェントデバイス３機：α、β、γ

魔具

愚直な崇高美

バリアジャケット：ＭＳ　ＲＸ７８ＧＰ０２Ａサイサリス

＊フィールドタイプの防御魔法と物質生成魔法の混合魔法にて魔力炉３基を精製して空気中の魔力（マナ）を取り込む事が可能。

それゆえになのはのバリアジャケットのエクシードモードの様に”魔力消費量が多くなり稼働時間が減る”という事がない。

魔力炉はα、β、γの３機が１基づつ制御している

ブーストインテリジェントデバイスのα、β、γを打ち切ってしまい魔力炉が使えなくなった場合ＳＳＳクラス以上の魔力を持つ刹那でも装備しているだけで１時間程で魔力を使い切ってしまう。

その分、防御力は果てしなく高く、ＳＳのなのはの最大砲撃スターライトブレイカーｅｘ－ｆｂでも大ダメージで収まる。

外見としては両肩の横部分に太陽路を追加したＧＰ０２

武装

愚直な崇高美（外見はアストレイレッドフレームの刀、魔力か気力を込める事で切れ味が上がる）

魔法式頭部バルカン

魔法式ビームライフル

魔法式ビームサーベル

対戦艦砲用大型ラジエーターシールド（バロン　ベルカ式カートリッジシステム搭載）

＊シールド内面にはビームバズーカ兼魔力融合玉圧縮分裂弾用バズーカが備え付けてある。

多連装魔法弾射撃システム（ＭＬＲＳ　Ｍｕｌｔｉｐｌｅ　ｌａｕｎｃｈ　ｒａｂｉｄ　ｓｙｓｔｅｍ）

＊魔法弾自体に自動サーチがついている為自分でコントロールしなくても追尾する魔法弾。片肩に３発づつ装備できる。

魔法式ビームバズーカ
魔力融合玉圧縮分裂弾ｘ３
＊ベルカ式カートリッジシステム搭載ブーストインテリジェントデバイスのα、β、γ自体を一機打ち出し弾の中にある複数の融合魔力をカートリッジを消費して得た魔力をブーストし更に圧縮融合させ、圧に耐えきれなくなったデバイスごと周辺魔力を喰らいながら暴走し、半径３０ｋｍを焦土と化す。
周囲の魔力を喰らいながらエリアが広がる為、防御魔法も魔法の構成ではなく魔力が分離し効果が落ちる。
その為、バロンにはカートリッジで防御魔法と物質強度強化魔法の効果を高めている。
使用後、魔力の無いエリアができ、そのエリアでは魔力の空間からの吸収が出来なくなるのでマナを使うスターライトブレーカー系統の魔法は非常に困難になり、威力もかなりの減退が起こる、弩級戦略兵器。

近衛木乃香
筋力：Ｆ（１３７）
耐久：Ｄ（２４４７）
敏捷：Ｅ（１１６４）
魔力：Ｂ（４３２７）
幸運：Ａ（５８６９）
黄金律：Ｂ（一生金に困ることはなく、富豪でもやっていける）
霊力運用：Ｂ（魔力、気力を霊力と合成でき、術の効力を上げる事ができる）

魔具
東風ノ檜扇（コチノヒオウギ〔ＦＬＡＢＥＬＬＵＭ　ＥＵＲＩ〕）
南風ノ末廣（ハエノスエヒロ〔ＦＬＡＢＥＬＬＵＭ　ＡＵＳＴＲＡ

ＬＥ」）

二つとも扇子だが双方で異なる形状をしており、それぞれ異なった能力を持つ。

「コチノヒオウギ」（木製の薄板を絹糸で束ねている方）には３分以内に受けた即死以外の怪我を完治させる能力が、

「ハエノスエヒロ」（紙製の扇面と扇骨を組んでいるほう）には３０分以内に発症した怪我以外の異常を治療する能力が備わっている。

ただし重傷の被治療者に「コチノヒオウギ」を使用する場合は、触れられる距離まで接近しなければならず、治癒に際して被治療者には苦痛を伴う。

この際膨大な魔力が流し込まれるため、治療後に過度の魔力によって熱病のような症状が起きる場合もある。

また、完全治癒は１日１回しかできないく、時間をかければ同じ効果を得る事もできる。

高町なのは

筋力：Ｆ（１７２）

耐久：Ｃ（３４８４）

敏捷：Ｄ（１７４９）

魔力：Ｃ（３６６７）

幸運：Ｄ（１３１４）

宝具：Ｃ＋＋（高位の威力、防ぐのはかなりの困難）

カリスマ：Ｅ（本来Ｄあるが本人が認識していない為にランクダウンしている、周囲の人間を惹きつける魅力がある）

補足

第０１話で

刹那のステータス

筋力：Ｂ（４７９３）
耐久：Ａ（５０４８）
敏捷：Ａ（５２５７）
魔力：Ａ（５６５９）
幸運：Ａ（５２５３）
なのはのステータスの一部として
「魔導士ランクＳＳＳで平均３０００最高値が５０００ぐらいじゃ、例をあげるならランクＳ＋のなのはのステータスで一番高い魔力がＢ（４２６３）じゃな」
と書かれていますが刹那のステータスはアーサー王と同じ、つまり１５才でのステータスになります。
なのはの魔力はＳＳ時の数値なので無印時点では少し低くなっています。
ちなみに無印時点での戦闘民族な人達は
恭也は平均２０００程
美由紀は平均１７００程
父上は何気に高く２３００程
母上も補助系術者としては最強で２１００程で恭也よりも強い
ただ、前二人は気力をもっているのでそちらでの補正があり、
後者二人は気力と霊力での補正があります。
第９７管理外世界　地球では魔力を持って居る人は殆どいませんが気、霊力を使える人はそこそこいます。
刹那も気を魔力と同程度もっていますが魔力と反発するため使用していません。
咸卦法を取得すれば同時使用も可能だが、気自体が加工して使うのが難しいためデバイスが刹那が使う複雑なバリアジャケットに対応できず、愚直な崇高美で使う神明流のみに使われている。
霊力は魔力、気と合成しやすく同時運用が可能なため現時点では特に記載がない場合を除き、同時運用です。
魔力は耐久と敏捷を、気力は筋力と耐久を上げるのに向いています。

また、ミッド式は基本オールラウンダー向きとなっていますが、筋力を上げるのに向いていません。
ベルカ式は気には劣るものの筋力もミッド式よりは上げやすくなっています。

人物紹介（後書き）

黒「やっとデバイス公開です」

刹「おい、なんでＧＰ０２なんだよ。刹那って言えばＦセイエイで近接剣士型のエクシアだろ。しかも、神明流使えるんだから尚更都合がいいだろ」

黒「それには理由があってね、このＳＳを書くにあたって作った設定で。」

・ネタ程度にとらハの霊力やら気の力
・ネギま同様で気と魔力は混ぜれない
・気は加工して使い辛く、魔力は加工しないと効果（意味）を持たせられない

黒「で、術式展開で作られたデバイス及びバリアジャケットには気を通せないというのができてしまって、持ち歩かないといけなくなってしまい、結果としてエクシアだと神明流が一切使えなくなるなんてオチが発生してしまったんだ」

木「結構かんがえてるんやね」

な「だったらアストレイのレッドフレームでよかったんじゃ？」

黒「うん。だけど大火力って持ってないじゃん。魔砲少女といえばやっぱり大火力、大火力といえばＧＰ０２だよね」

刹「大火力すぎると思うんだが」

黒「最初は映画版なのは１ｓｔの全力全開スターライトブレーカー並の直接火力直径５ｋｍ程度の広島型のつもりだったんだけど、原理を魔法で再現できそうになかったから、そこで超高温、超高圧を利用して、重水素や三重水素の核融合反応を誘発し莫大なエネルギーを放出させる純粋水爆をモデルに威力をビキニ環礁のと同程度の１５メガトンに魔力融合玉圧縮分裂弾を作成しましたｗｗｗ追加書きしては喰らいながらと書いてるが実際は対消滅によりエネルギーを奔流として使われる形になるんだ」

な「ほぇ～～あたしのそんな威力ないもん」

黒「いやいや、あれは半径２ｋｍぐらい普通にあったでしょ。最低でも１０キロトンクラスはあるって」

木「１０キロトンクラスってなんや？」

刹「この場合のキロトンはＴＮＴ爆薬に換算した時どの程度の威力があるかを表す単位だな、ちなみに広島が１５キロトン、長崎が２０キロトンだ。広島が爆発地点、空中の７５０ｍで約２ｋｍ離れた建物が全壊したらしいから、爆発力での威力としては３ｋｍぐらい離れてたら魔導士ランクＢ、上の数字で言うなら耐久１５００ぐらいで防げる事になる」

黒「とまぁ科学＋歴史っぽい話はこの辺でやめて、しようと思ってた話を」

木「なんや言いたい事あったん？」

黒「とりあえず、後書きの次回予告関連」

刹「第０１話は無印の１話の次回予告だよな」

木「第０２～０３話は魔法先生ネギまの第０１～０２話の予告やね」

な「前回は映画１ｓｔのプロモーションムービーにせつなクンとこのかちゃんのセリフを追加しただけだよね」

黒「うん、毎回そんな感じでパクっていこうかとｗｗ」

な「おりじなるで勝負できないんだね黒くん」

黒「グサっとくるがわかる人がニヤっとできればいいやぐらいにしか考えていないからね。あと、タイトルはわかる人がニヤニヤしてくれ」

な「ｓｕｐｅｒｃｅｌｌだよね、これぐらいみんなわかるよ」

刹「いや、わからない人もいるでしょ、ウチも言われて、気付いたし」

木「それで、どんな風になる予定なん？」

な「あたしとせつなクンはどうなるの？黒くん」

黒「なのはまだいなかったから知らないのか、今のところ刹那ｘなのはでキャラが動き回ったらフェイトも有り得る、それに木乃香黒化ルートとりあえずＡ'ｓ中盤までは特にルートはないかな」

刹「増えてるし・・・」

木「ふぇ～と…白髪の人がでてくるん？」

な「白髪？フェイトちゃんは金髪だよ？」

木・な「？？？」

黒「白髪のフェイトはこの世界にいない、だから英雄の子の村が石化させられたりもしない。そもそもこの世界には英雄も英雄になっていないし、裏側には魔力を使う人は全然いない、殆どが霊力や気の力だ。なのはも訓練すれば気は使える」

木「それでウチとせっちゃんの場合がないんはなんで？」

黒「なにがそれでなのかはわからんが、ちゃんと黒化ルートで用意してるじゃん」

木「いいイメージが全然わかんのやけど、どんな感じなん？」

黒「木乃香が属性反転して闇の魔法取得。Ａ'ｓで闇の書をコンプレクシオーで取込んでオルタヴォルケンリッターを使って奪取しようとするｗｗｗ」

刹「公言してるとはいえ、酷い扱いだな」

な「そういえば、はやてちゃんは・・」

黒「殆ど出番はありません、ただでさえ木乃香と口調が被って判りにくいってのに、片一方が空気になるかはやての成分は９５％エロで出来てますって形にしかできないっとそろそろ時間も押してるし

この辺でゲストによる次回予告で終了だ」

刹「逃げやがった」

ア「あたしの奴隷になりなさい。うんうんいいフレーズ我ながらきまったわね」

刹「なに、勝手な事いってんだ、バーニング」

す「それよりも、刹那君一緒に班を組まない？」

木「ふざけんといて、なんでそんなことゆ～たん？もともとウチとな「はにゃ～撫でられるの気持ちいい～」

ア「人の話を聞きなさいよ」

第05話　Ｆｅｅｌ　ｓｏ　ｇｏｏｄ（前書き）

そんなこんなで無印本編開始！
どの程度、本筋ブレイクするか決めかねています。
とりあえず、ちゃっちゃかフェイト登場まで進めたいと思ってます。

第05話　Feel so good

なのちゃんと出会って早6年。
小学3年になりました。
1年の頃にはバニングスとのケンカもあったし、変わった事といえばウチの親が仕事に行く時は高町家に預けられる様になった事ぐらいだろう。
原作介入しやすくなるし、なのはの紫式計画も実行しやすくなるから助かっている。
ウチが行くと恭也さんが居心地悪そうにしてるけどねｗｗ
ん、木乃香は相変わらずなのちゃんにした事と同じ事を施がってくるよ。
ちょっとメンドクサイ。
それでも学校ではすずかとセットで清涼剤になってるよ。
アリサとはケンカ友達、バーニングって呼ぶとすぐ突っかっかってくるからついついやってしまう。
そんこんなで楽しくやっている。

今日もそんな一日の昼休み。

「将来か～皆は結構決まってるんだよね」

ん？この話題。覚えがある気がする。

「ウチは、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して後を継がないとぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職が良いなと思ってるけど」

「ウチはせっちゃんのお嫁さんや」

「せんと何回言ったらわかるんだ？この娘さんは・・・」

はぁ～となのちゃんがため息をつく。

「そっか～三人ともすごいよね」

「いやいや、なのちゃんお嫁さんは職業じゃなくて状況だから」

「あ、せつなクンはお父さん達の後を継ぐって聞いてたから、それで三人だよ」

それを聞いて、ホッと一息つく。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

とアリサ。

家業関係に就くと言ってるいる、ウチ含む二人が凄いのかと疑問に思いつつも。

「うん、それも将来のビジョンのひとつではあるんだけど、やりたい事は何かような気がするんだけどまだそれがなんなのかはっきりしないんだ、あたし、特技も取り柄も特にないし」

何を言ってるんですかなのちゃんは・・・

転生前の２０年のアドバンテージがあるウチと英雄並の魔力を保持してる木乃香の訓練に普通に着いてきて、ＨＧＳ（高機能性遺伝子障害者）も真っ青な程の能力を既に持ってるのに。

とそんな思考をしていたらアリサが立ちあがる。

「バカチン！自分からそういう事、言うんじゃないの！」

「そうだよ、なのはちゃんにしかできない事きっとあるよ」

「焦って決める事でもないし、じっくりなのちゃんのやりたい事を探せばいいよ」

「だいたいアンタ、理数の成績はこのーあたしより良いじゃないの、それで取り柄が無いとか、どの口よ」

「そうそう、なのちゃんは幾つも同時に考えるの凄いし」

と言いつつアリサと一緒に飛びかかり頬っぺたを引っ張る。

「うぁーはぁにゃ　だってこにゅも苦手だし体育も苦手だし」

「あ、二人ともダメだよ。ねぇ、ねぇってば」

そんな事が有りつつも、午後の授業をお昼にあった”覚えがある”というのがどうしてなのかを思い出そうとしてた。

まぁ体育のドッチボールの最中にしてたせいですずかにあてられてしまったけど。

「今日のすずか、ドッチボール凄かったよね。アンタも当てられていい気味よ」

「ちょっと考え事してたん、あ」
「どうしたのせつなクン？」
「いや、なんでもないよ」
思い出した、今日はユーノが現れる日だ。
「ああ、危ないから入っちゃダメだよ」
ボート乗り場で係員に止められる。
いや、裏を通ろうとしただけなのに。
「あ、はい」とアリサが返しつつ何があったか聞いてる。
なのちゃんが急に辺りを見渡しだす。
「なのちゃん、どうしたの？」
『助けて』
こっちに顔を向ける。
「なのはちゃん、どうしたん？」
木乃香、感度悪いな。今の聞こえなかったのか？
「せつなクン！今、何か聞こえなかった？」

「聴こえた、あっちか？」
と言って走り出す。
「なのちゃん、この中辺りかな？」
頷くのを確認して、柵を超えて行く。
少し進むと魔力を持っている生き物が寝そべっている。
「さっきの、この子だ」
「怪我してる」
あとの三人が追いついてくる。
「どうしたのよ、二人とも。急に走り出して」
「あ、見て動物、怪我してるみたい」
「病院に連れてかんと」
「獣医さんだよ」
二人がいなければ木乃香の祈祷術で治せるんだが、可能な限り秘匿せよってのがあるし。
まぁ、命に関わる傷はなさそうだし獣医で問題ないか。
ん、近くに妙に大きな魔力があるな。
だいたいウチの１／３ぐらい、まさか発動中のジュエルシードが近

くにあるのか？
どういう行動パターンで動いてるのかわからないけど防衛に回れば
かなり強い二人がいるし探しに行ってみるか？いや、下手に動いて
なのちゃんが危険になるのは見逃せない。

そのまま槙原動物病院にユーノを連れて行った。
結局、明日まで預かってもらい、ウチの家で引き取る事に。
結構ある高町家お泊りの際に連れてきてもいいという許可ももらった。
その際はなのちゃんにいかに可愛いかを桃子さんに説いてもらい、
その頑張っている姿をのほほんと見ていた。
士郎さんが親指を立ててグッと向けてきた、お主も好きじゃのうｗｗ
ちなみに今日はお泊りです。

・・・あれ？そういえばなのちゃんの指を舐めるという変態行為が
なかったぞ。
それに、近道に入った所で念話があるんじゃなかったか？
おかしいな、記憶と噛み合わないな。

っとそんな事を考えていたらユーノからの念話が聴こえてきた。
すぐになのちゃんがウチの部屋に飛び込んでくる。

「せつなクン、今の聴こえたよね」

「うん、あのフェレットだ」

すでにフル装備で準備をしているが、今回はできるだけ急ぎたいか
ら魔具の刀は置いて行く。

桃子さんにコンビニに行ってくると言いつつドタバタ家を出る。

第05話　Feel　so　good（後書き）

黒「さてさて、本編第01話も始まりました」

刹「第01話って変身する所迄じゃなかったっけ？」

黒「戦闘の最中にぶった切ると見辛いかな～って思ってね」

獣「それより、僕、念話でしか喋ってないんだけど」

黒「ウチ、お前さんの事嫌いやねん」

木「めずらしぃな、何も言わずに嫌いゆぅんは」

な「どうしてなの？」

黒「男のくせに管理外世界（この世の果て）で恋を唄い出しそうだから」

刹「あーなのちゃんと木乃香にはわからない理由か」

獣「僕も意味がわからないんですけど、教えてください。あと、この表記もどうにかしてください！」

刹「昭和50年代生まれの人ならわかると思うから聞いてみ。表記も変えてやるよ」

淫獣「ホントですか、ってもっとひどくなってるじゃないですか！！」

な「いんじゅうってどういう意味なのせつなクン」

刹「答えづらいな・・・とりあえずなのちゃんは知らなくて良い言葉」

黒「親愛を込めて、魔法使いの異性の使い魔って所だね」

黒「それよりもお気に入り登録してくれた１０人の皆様にお詫びを申し上げます（２０１１／１０／１１記入）」

刹「どうしたんだ？急に畏まって？」

な「似合わないの」

黒「実はこの５日間、一切続きを書かないでいて書置き分が４話まで減ってしまいました」

木「どうしてなんや（ゴゴゴゴゴゴゴッ）」

黒「実は・・・ハロー天気さんがワールドカスタマイズクリエイトと異界の魔術士を更新して、内容が思い出せなかったから最初から読み直していました、すみません」

な「読むのはいいと思うけどちゃんとするの」

刹「そうだな、これから足りなくなった２話分を頑張って確保すればいい」

黒「そりゃ頑張りますが、実は１週間程電波の入らない実家に行かないと行けなくて、書き上げてる分を予約投稿で３日に１話のペー

スで１０月２２日分の第０８話までうｐするけど長引いてそれまでに帰ってこれなかったらうｐが遅れます」

刹「すまないな、こんなバカな書き手で。みんなで謝ろう」

な「うん、あ、フェイトちゃんいいところに。黒くんがおバカしちゃったから一緒に謝って」

フ「いいよ、作者（馬鹿）のフォローするのも役目だからね」

黒・刹・な・木・フ・は

「ゴメンなさいです（や）」

黒「ん？なんか聞き覚えのない声が、まぁいいやそれでは次回予告を」

は「ちょ、（ひど～ない）

刹「人間だろうとフェレットだろうとウチの使い魔になったからにはビシビシ調教してやるから覚悟するんだな」

な「ふぁふぇぇぇ、どうなってるの？ジュエルシードの封印って？」

刹「次回　星が瞬くこんな夜に」

第０６話　星が瞬くこんな夜に（前書き）

本編第０１話後半から開始。
ちなみに木乃香は既に寝ちゃってますので出番無しですｗｗ

第０６話　星が瞬くこんな夜に

道路に出た瞬間になのちゃんを抱えて屋根の上まで飛び乗り、最短距離で突っ切る。

近付くと空間が切り替わる、結界が張られた様だ。

槙原動物病院に駆け込むと、ユーノが空中に舞っていた。

落下位置になのちゃんを置くと、祟り神擬きが突っ込んできたから、自分より大きいシールド型デバイス：バロンを展開して、押し返す。

昼間の魔力量からして簡単に押し返せると思ったら、急に魔力が増え押す力が拮抗する。

「こいつ、人を喰ったのか？」

人を襲う描写はあったものの、これだけ魔力をあげようとすれば相当な人数を喰べなければならないから、違うと判断して直ぐに考えを切り替える。

「フェレット！魔法具を持ってるならなのちゃんに、その子に渡して使わせろ！お前が使うより何倍も良いだろうからな」

言い終わると同時にビームサーベルを展開して斬りかかる。

ビームサーベルに反応して祟り神擬きが後ろに飛び退く。

縋る様に前に出て距離を離さない。

祟り神擬きが止まった瞬間に素早くジャンプをし、足を空に向け魔

力で作った足場を蹴り一気に押しつぶす。

だが、バロンが触れた瞬間にゲル状になり、横に滑り抜けられる。

地面にバロンが着いているのを見て、スキがある様に見えたのだろう、そのまま襲いかかってきた。

「残念だが、それは見えている」

左手にはシールドは握られておらずビームライフルがあり、右手のサーベルも既に手にしておらず、バロンからビームバズーカを掴み、周りに被害が出ない様に出力を調整済。

接近して来た祟り神擬きにゼロ距離で撃ちこむ。

直撃を避けようとした祟り神擬きが体の1／3を爆発させ空を飛び。

空から触手を伸ばしこちらを攻撃してくるが。

「当たらなければどうということはない」

無数の触手の内、一本がなのちゃん達に飛んで行く。

届く前にライフルで撃ち落とす、その瞬間。

なのちゃんが光を放ち、空に舞う。

地面にその光が反射するものがあるのに気が付く。

魔力を持っている宝石（ジュエルシード）がある。

ここにある理由はわからないがとりあえず回収し、祟り神擬きとなのちゃんの間に飛び立つ。

「デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか？」

今の声はレイジングハートか。

「なのちゃん、砲撃と誘導弾幕、それにバリアの強度を持たせやすい形に」

「マスター、それでよろしいでしょうか？」

「あ、はい。それでお願いします」

「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ」

「ちょ、水は火で風に、風は時で雲に［夢幻雲］」

周りに人がいるのに視界阻害用の魔法も展開せずに変身しだしましたよ、このデバイス。

仕方ないからこっちでなのちゃんの周囲に霧を作ってユーノ対策を。

ってそのユーノに体当たりをかまそうとしてやがる！！

「ショコラ！Ｓｅｔ　Ｕｐ」

「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ」

体を盾にしてギリギリで割り込み、手で押し返す。

「騎士型のバリアジャケット！？」

「ガンダムは伊達じゃない！」

全力で魔力を噴射させ、空に押し返す。
良いタイミングでなのちゃんが霧から出てくる。

「なのちゃん、射て！」

「うん」

なのちゃんが放った魔力弾が崇り神擬きを撃ち抜くが二体に分離して逃げ出す。

「っち、逃がすか！」

「なのちゃんは、右のを、ウチは左を射つ」

「わかったの」

急いでビームバズーカを拾い、空中に戻ると、なのちゃんは既にチャージを始めてる。

「まさか、封印砲？あの子達、砲撃型」

「なのちゃん、タイミングはそっちに合わせる。合図をくれ」

こちらを見て「うん」と頷き集中する。

「いくよ、シューート」

「てぇぇぇ」

2人の砲撃が伸びて行き、祟り神擬きを撃ち抜く。

「Ｎｉｃｅ　Ｇｕｔｓ」

「一撃で封印した」

撃ち抜い辺りから2つ宝石が飛んでくる。

「なんだ、あの宝石？」

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

と、ユーノが言うが待ったをかける。

「これはさっきの祟り神擬きの原因か？なら、まずは管轄部署で登録後、管理か観察になるんだが」

「これは凄く危険な物なんです！だから封印をして管理局に保管してもらわないと」

うん、この獣バカだ。

「封印はともかく管理局ってなんだ？少なくともこの国にはないぞ」

「貴方、魔導士でしょ、知らないわけないでしょ」

と、視線を額のデバイスに向ける。

「ウチが使ってるコレは神託物と呼ばれる物だな。未知のテクノロジーで作られている術的物品」

まぁ、神様がウチ専用にしてからくれたデバイスだけどね。

「Ｍａｓｔｅｒ。このルールも知らぬ愚か者に矜持という物を教え込んでいいか」

とデバイスのショコラもお怒り。

「まぁ待って、先に情報収集をしてから・・と言いたいけどその前に移動と電話だね。とりあえず、ショコラ、氷結封印」

「了解」

ジュエルシードを幾重にも封印術式が組み込まれた氷の中に保管。バリアジャケットも除装。

それを見て、レイジングハートも除装する。

なのちゃんが馴れない魔力消費をした為かバランスを崩しそうになったのを肩を抱いて助ける。

「大丈夫、なのちゃん」

「う、うん。ちょっとふらついちゃっただけだから」

その後、バロンを回収してＢクラスの祟り神が出たので駆除したが周りの人には出していないと思うが建築物にはでたという形で両親に連絡後に帰宅。

「おかえり」

「お兄ちゃん・・」

「こんな時間に何処にお出かけだ？」

「何隠したの？あら、可愛い～」

「美由紀さん」

「あら、なんか元気ないね。なのははこの子の事が心配で様子を見に行ったのね」

「え、っとその」

「気持ちはわからんでもないが、だからと言って内緒と言うのはいただけない」

「ん？お母さんに言って出かけたって聞いたけど」

あれ？もしかして恭也、桃子さんからハブられてる？
いやいや、流石にそれは。
ウチとなのちゃんが一緒にいるのを嫌がってるから伝えなかっただけだろう。

「それに、こうして無事に戻ってきてるんだし、それになのはも刹那も良い子だからもうこんな時間に出掛けたりしないもんね」

「うん、そのお兄ちゃん。出掛けて、心配かけてごめんなさい」

「遅い時間になのちゃんを外に連れ出してゴメンなさい」

「はい、コレで解決」

美由紀さんがなのちゃんに微笑みかける、そしてユーノを抱きかかえる。

「でも、聞いてた通り可愛い動物ね。母さんなんかこの子見たら可愛い過ぎて悶絶しちゃうんじゃない」

はぁと恭也が溜息をついて。

「その可能性は否定出来んな」

家に入り、ユーノを桃子さんに見せたら可愛いがられて３０分。
その間になのちゃんにお風呂に入る様に言うと、一緒にと言うので一緒に浸かる。

その後、なのちゃんの部屋で話をもとい尋問開始。

「ボクは、この世界の外、別の世界から来ました。さっき貴方が使ったのは魔法。ボクの世界で使用されている技術です。あなた方が闘ってくれたのは、ボクたちの世界の危険な古代遺産、ロストロギア、ジュエルシード」

「ジュエルシード」

「ちょっとしたきっかけで暴走してさっきみたいに暴れだす事もある、とても危険なエネルギー結晶体なんです」

「そんな危険な物がなんでこんな街中に現れたんだ？」

「それは、ボクの所為なんだ。ボクは故郷で遺跡の発掘を仕事にしていて、古い遺跡の中でアレを発見して、管理局に依頼して保護してもらおうと思ったんだけど、ボクが手配していた次元艇が途中で事故にあったみたいで。２１個のジュエルシードがこの世界に散らばった。回収で来たのはあなた方が手伝ってくれた２個だけ」

「あ、自己紹介遅れてゴメン、あたしなのはって言います、高町なのは」

「そういえばしてなかったな、ウチは刹那。関西呪術協会及び関東魔術協会両報告官、流派京都神明流が青山刹那」

「あ、ユーノです。ユーノ・スクライヤ」

「よろしくね、ユーノ君」

「とりあえず、今日はもう遅いし、こっちの事をどこ迄話していいかわからないから、詳しい事は明日話そうか」

「はい、わかりました」

「ねぇ、せつなクン、一緒に寝てもいい？」

「うん、いいよ」

朝、木乃香に首を締めつつ振り回されながら叫ばれたのは別の話。

第０６話　星が瞬くこんな夜に（後書き）

黒「既に気付いている方もいるかと思いますが、基本の流れがＴｈｅＭｏｖｉｅ１ｓｔになっていますが、刹那はアニメ版の知識です」

刹「ＴｈｅＭｏｖｉｅ１ｓｔって映画になったのか？」

な「みて、くれてないの」

刹「ウチがいた世界では映画になってなかったんだ」

黒「正確にはまだなっていなかっただな。刹那はＳＳ放送の次の年死んだ事になってるから。だからガンダムダブルオーの２ｎｄシーズン初期の兵器の知識しかないんだよね、だから今の状態でトランザムするとどうなるかも知らないｗｗ」

木「ウチのおった世界にもなかったんよね」

黒「正確には中途半端に存在してた。簡単に言うと、トラははあったけどなのははなかった、魔法関係者が何故かストップをかけちゃったんだよねｗｗ」

な「ほぇ～しがらみがいっぱいなの」

刹「なのちゃんは知らなくていい事柄ばっかりだね」

な「う、うん、そうなの」

黒「あ、なのはの砲撃とかと比べると地味で使う事も圧倒的に少な

いけど今回出てきたオリジナル呪術［夢幻雲］ただの煙幕代わりで霧散しにくい霧を出すだけの呪術」

刹「なのちゃんの着替える所なんて人に見せるわけにはいかない」

な「ありがとね、せつなクン」

黒「あ、そうそうこの世界にはアーネンエルベとかコペンハーゲンもあったりする」

刹「ん、って事はブラウニーがいるのか？」

黒「いるよ。赤い悪魔や冬の聖女とか呼ばれてるブラウニーの姉も。ちなみにブラウニーが美由紀とクラスメート」

美「ん、呼んだ？」

な「お姉ちゃん、妖精さんが、ブラウニーさんがクラスメイトなの？」

美「ああ、彼ね。あだ名と言うか通り名と言うか、頼むと殆どの事をやっちゃう人がいてね、それで「鳴海のブラウニー」って言われる様になっちゃったの」

刹「優良株だから赤い悪魔に取られる前にいい仲になるのをオススメするよ」

美「あ～あんまり話した事ないんだけど、そんなに優良なの？」

刹「鍛えれば恭也より強くなるし、料理の腕も桃子さんの一歩手前、

いくらでも潰しの効く程の職をつけてる、しかも強引に迫れば既成事実も簡単に作れる。自分の理念が強いのと人が良すぎるのがちょっと気になるがかなり一途、しかも叱るべき時はちゃんと叱れる。試しにデートでもしてみれば？」

美「そっか～そこまで言うなら一回誘ってみるよ。というよりなんでそんなに詳しいの？」

刹「あそこの親が以前、関東魔術協会で働いていて、今もウチが動（なの）けない時（ちゃんとの用事の）に変わりに動いてもらってる関係で知合いだったり、前の世界で同級生だったから、前の世界だと常に腹ペコな彼女がいたけどこっちだといないし」

黒「あ、ちなみに刹那がいた世界、木乃香がいた世界にはなのは達はいなかったから。具体的に言うなら。
刹那がいた世界は型月の世界が基本にネギまの人物もいる
木乃香がいた世界はネギまの世界が基本に型月の人物もいる
なのはのいる世界はＴｈｅＭｏｖｉｅ１ｓｔ基準にトラはに型月やネギまの人物もいるしＨＧＳ（高機能性遺伝子障害者）も存在する。
立地的には冬木は鳴海と同じ場所で、麻帆良学園はもう少し北にあるあと、この世界、第９７管理外世界地球では魔力と霊力は同じ物とされているが、実際は霊力。ミッドチルダ側には霊力の計測機器は存在しない。
だから、ミッドチルダ側としてはレアスキル持ちが沢山いる世界として認知されている」

な「ふ～ん、そうなんだ」

黒「なんか、ウチに反応薄くないですか？なのはさん。まぁいいけど。じゃあ次回予告を」

木「このオコジョ早くしんさい、せっちゃんがヒロインのウチを差し押さえてなのはちゃんに連れ出されたんや」
ア「それ、あたしのセリフじゃないの・・次回魔法少年マジカルせつな終わりへ向かう始まりの歌。次回こそ出てやるんだから大人しく待ってなさい」

第０７話　終わりへ向かう始まりの歌（前書き）

ん、なのはが普通にお風呂や一緒に寝ようと誘うのはおかしいって？
何を言っているなのはは既に刹那と一緒になるもんだと思ってるから問題ないんだよ。
刹那と桃子さんの教育のお陰なんだよ。

第07話　終わりへ向かう始まりの歌

さて、ジュエルシード事件も始まった事だし、何かと忙しくなるだろう。
最寄りとしては今日の下校中にある八束神社の犬、明日の夜も何処かの学校で封印作業。
その次は街に影響のでる木の事件、すずかの家で起こるビックキャット事件とフェイトとの邂逅、温泉での淫獣事件及び自己紹介？
鳴海海岸公園での共同戦線にＫＹ登場、桃子さんへの説明からアースラへの移動、フェイトとの共同戦線、決闘。
その後にプリシアとの決戦。
うん、１ヶ月そこらで起こるには密度が高いな。
しかも、ＫＹ登場まで夜も日が変わる前とはいえ動き回らないといけないからなのちゃんが疲れないかと心配だ。

現状、悩むべきはデバイスも持っていない木乃香を参戦させるかだな。
魔具（マジックアイテム）こそあるが反射神経等は戦闘に使えない。
回復役がいるのはずいぶん楽になるが。
それに、フェイトとの決戦がある以上なのちゃんの強化手段の実践経験を奪ってしまうのも得策じゃない。

取り敢えず、なのちゃん。
この右手にくっついている木乃香をハリセンで叩いてくれないか？
学校に行く前になのちゃんも念話が使える様になった、まぁないしょ話がし易くなった程度にしか認識していないが。
いや、念話ね。

あれの傍受えらい簡単なんだよ、まず、相手にラインを引く為に全方位に魔力を放つ、デバイスとかで大体の位置が特定出来てるならそっち側にしかださないが、その後は魔力式糸電話。
張ってある糸にこっちが糸をくっつければ聞こえるし発言も出来る。
一応、暗号化してあるけど、お互いの固有魔力波長を使ってるだけ。
つまり、念話している人を知っていれば簡単に解読可能。
流石に自分のデバイスとの念話の盗聴は無理があるけど、デバイスに直で繋げれば会話への参加要請もできる。

それで、授業中になのちゃんとレイジングハートと会話していた。
内容としてはデバイスとはどんなもんなのかという感じ、デジ物が好きななのちゃんは興味津々でした。

ん？こんな事ってあったか？確かユーノとの会話だった気がしたが、確かに夕べの時点で大体は話終わっているから問題ないが。
まぁ気にしても仕方ない。

そんなこんなで放課後。

「じゃあ、あたしとすずかはお稽古の日だから」

「いってきます」

「うん、お稽古頑張って」

「頑張ってな」

「ウチも頑張るから二人も頑張ってな～」

木乃香よ、何を頑張るんだお前は。

２人が車で行く時、ウチとなのちゃんは手を振るが木乃香はウチの手にぶら下がる・・・
男で身を滅ぼさなければ良いんだがこの娘。

「じゃあ、ユーノと現状どうするかを話ながら帰るか」

「ユーノってだれなん？」

ああ！そういえばユーノの事を木乃香に一切言ってなかった。

（ショコラ、会話をユーノに飛ばして、向こうからの念話を２人にも）

（ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ）

「ユーノが言うのをウチが仲介して２人にも聞こえる様にするから。あーあー、ユーノ聴こえるか？」

（うん、刹那君）

「取り敢えず、自己紹介だ。今朝いたフェレットのユーノ。異世界から来た生き物で、感覚としてはオコジュで問題ない。で、ユーノ今朝一緒に出たもう一人の女の子で近衛木乃香」

（え、教えて良いの）

「元々、裏側の家系でこの念話も仲介して聞こえてる」

「よろしくや、ユーノ」

（あ、はいよろしくお願いします。木乃香さん）

「それで夕べのジュエルシードの話なんだけど」

その時、耳鳴りの様な音と共に大きな魔力の波動を感知する。

「あ」

（この反応）

「ジュエルシードだな、まだ木乃香用のデバイスがないが。仕方ないバロンを使ってくれ」

「バロンっておっきな盾やな、その裏から祈祷をあげればええんやな」

デバイスを渡し、三人で走り出す。

「ああ、急ぐぞ。木乃香は走りながら自分を守る物を想像しといて」

５分もないぐらいか走ると目の前に光が昇る。

「既に誰かいるのか？人もいないしＳｅｔ　Ｕｐして突っ込むぞ」

（ってダメだよ、僕が合流する迄待って）

「待てない、人や生き物が巻き込まれちゃうかもしれない、夕べはちゃんと出来た。今日は木乃香ちゃんもいる、だからきっと大丈夫」

「なのちゃん、だからもきっともいらない絶対大丈夫だ！前衛はウチが、なのちゃんは援護射撃を木乃香は捕縛系で援護を」

「行くぞ、ショコラＳｅｔ　Ｕｐ」
「レイジングハートＳｅｔ　Ｕｐ」
「バロンはんＳｅｔ　Ｕｐや」

三人のセットアップが完了し・・・バロンがウチに似ている翼の生えた女の子になってるだと！？
えぇい気にしたら負けだ。

前方を見ると黒豹に翼が生えているのが空を舞っている。

「刹那、行っきまーす！てぇぇりゃぁぁぁぁシャー（桜）イニング（楼）フィンガー（華）！」

そのまま地面に叩きつけ、一気に封印を施す。

「ジュエルシード封

「ＧＵＲＹＵＵＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ」

千切れかけていた腰から下に、押さえつけていた手を引きちぎり飛び立たれた！

「くそ」

近くにいた、最初の介入者が突っ込んで行く。

「おい、危ないぞ！」

「ジュエ

なのちゃんの砲撃が介入者ごと焼き尽くす。
だから言ったのに・・・

落ちてくる介入者をキャッチ。
なのちゃんよりも長い金髪のツインテールにマント、腰に飾りを着けたレオタード、どう見てもフェイトです。

フェイトの参戦ってもっと後じゃなかったけ？
街に被害にでる木の事件の後だよね。

先にジュエルシードを封印しておくか。

「ショコラ、ジュエルシードを氷結封印」

「Ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

どうした物か。

「せつなクン、その子大丈夫？背中からだったから何も出来なかったみたいだけど」

「ああ、気絶してるだけだから大丈夫だよ。非殺傷設定もあるし死んだりはしないよ」

「とりあえず、ウチの家に連れて行こうか。すぐには目を覚まさないだろうし」

フェイトを背負って歩き出す。

「所で、羽付の女性になったバロンはなに？」

「これはせっちゃんや」

うちゅうのほうそくがみだれる！

「木乃香ちゃん、せつなクンは男の子だよ」

「何を言ってるんですか、私は女です」

「バロンが喋った・・・いや、木乃香が喋らせただけだよな」

「ううん、ウチはなんもしてへんよ」

伊達に９年も一緒に居たわけじゃない、嘘をついてるかぐらいはわかる。

「ショコラ、バロンの状態チェック」

「Ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

結果を聞くとユニゾンデバイスと化していた。

理由と思われるのは、自分を守る”者”として前世に居た桜咲刹那という人物を思い出したそうで、それを（仮にも神様がくれた高性能デバイスが）正しい形で叶えてしまったそうだ。

「お前、アホか」

思わず声が漏れてしまった。

「おい、貴様、このちゃんにアホとはなんだ『ａｄｅａｔ（アデアット）』『匕首（シー）十六串呂（カ・シシクシロ）』」

いきなり１６本の小刀が現れ、８本が飛んでくる。

「な」

飛んできた内４本を頭部バルカンで撃ち落とすが、全部は間に合わない！

「ディバインシューター！」

当たる前になのはの魔法弾が間に現れて、相殺する。

「せっちゃん！せっちゃんをイジメちゃだめや」

「は？わ　私はこのちゃんを侮辱したこいつを」

「はいはい、悪かったよ。ウチもなのちゃんも木乃香の味方、とりあえずそれで納得してくれ」

女の子を二人も追加で連れ帰ったウチを母上がシゴかれるのはまた別の話

第07話　終わりへ向かう始まりの歌（後書き）

黒・刹「なぜこうなった」

刹「お前が言うな」

黒「いやいやー、桜咲刹那を出すつもりなんて全くなかったんだよ」

桜「貴様、どうやってこのちゃんを守るつもりだったんだ！」

黒「どうって頑丈なバリアジャケットのＭＳヴァーチェ辺りとフェイトで」

フ「え、私が？魔法少女マジカルなのははなのはと私の友達になるお話じゃないの？」

黒「なのはは友達、木乃香が親友です。フェイトには木乃香のストッパーも頼むつもりだし」

狼「あんた達！フェイトを攫ってどうするんだ！」

フ「アルフ、いきなり本編の事、聞いちゃダメだよ。あんまり考えてない黒桜が困っちゃう」

黒「ちょヒド、確かに本筋しか考えてないけどみんなの幸せを願ってるんだよ。それにどうするってそんなの決まってるじゃないか！なのは名セリフを言ってくれ」

な「え、と、友達になりたいんだ」

黒「正解！それに刹那に木乃香、キャッチ用に言ったセリフ」

刹「幸せになってほしいんだ」

木「護るから一緒にいさせてや」

黒「それらを統合した結果、最終的にフェイト・T・アオヤマになってもらいます」

フ「え、お、お兄ちゃん・・」

K「ん、呼んだか、フェイト。黒桜、なぜ僕だけイニシャルの一文字なんだ？そもそもイニシャルならCが正しいんだが」

黒「ん、前もやった気がするけど、修正してやる」

KY「何をそんなに気合をってKYってなんだ！？」

黒「いや、KYでしょ、今の現れ方とか含めて」

皆「うんうん」

淫獣「もう、僕は諦めました」

桜「ん、カモミールとかいう変態じゃないですか。このちゃん近付いちゃダメですよ」

木「は～い、せっちゃん」

黒「じゃあ、ちゃっちゃか次回予告いっちゃおうか」

木「信じられるのは目に見える事」
刹「信じられるのは生きずく事」
フ「信じられるのは私の事」
な「魔法少年マジカルせつな
　　Ｔｈｅ　Ｍｏｖｉｅ　１ｓｔ編　チャプター１２
Ｉ　Ｗａｎｎａ　Ｂｅ　Ｙｏｕｒ　Ｗｏｒｌｄ」

第08話　I Wanna Be Your World（前書き）

前回の最後の別のお話はもうチョイ後の出来事です。

第08話　I Wanna Be Your World

さて、この娘(フェイト)はどうしようか？

1．見なかった事にしてさっきのジュエルシードがあった辺りに置いてくる。
これはダメだよな。

2．とりあえず捕縛。
なのちゃんに嫌われるｏｒｚ
これもダメだな。

3．巻き込んじゃってゴメンなさい。と謝り、本編通りに事を進める。
まぁ安全策ではあるが正直これを機にプリシアをどうにかしたいとも思う。

4．どうにか味方につける。
どうやってだ？と思わなくもないけど、敵から外してもらうぐらいはできそう。

今も木乃香となのちゃんが甲斐甲斐しく状態をみてるし（その後ろでバロン(羽付の女性)が見張ってる）、起きがけに敵意を取っ払ってしまえれば中立判定ぐらいしてくれそう。
その後にしっかり話をして、保護兼ジュエルシード集めをしつつプリシアと会談。
治癒系術を魔法の情報交換を取っ掛かりに取引開始、その際に反魂の術もちらつかせる。

うん、デタトコ勝負になるけど４で行くのが良さそうだ。

まぁ反魂の術は成功率なんてないに等しいし成功しても一時的が限界だろうけど。

「その娘が起きる前に聞きたいんだけど、この女性ってモデルは誰なの？」

「私は桜咲刹那、このちゃんの幼馴染です。それよりもこのちゃんが可愛(幼く)くなっているのですか？それにココは何処ですか？麻帆良でも魔法世界(ムンドゥス・マギクス)でもないみたいですが」

「とりあえず、状態異常診断能力に異常があるみたいだな。で、だ。そもそも木乃香は9才だからだ、ココは鳴海市で麻帆良も魔法世界(ムンドゥス・マギクス)もこの世界にはない。桜咲さんはウチのデバイスを媒体に木乃香が魂を召喚、実際はコピーだろうけど。それをデバイスに定着させたんだろう。体内魔力とかを確認してみればわかるはず」

「ふむ、今迄の身体とは違うのは確かな様だ、魔力の流れや質が違う。それよりも貴様は何者だ、何故、お嬢様と一緒にいる」

なのちゃんに視線を送ると頷き、自己紹介をはじめる。

「あたし、高町なのはです。よろしくおねがいします桜咲さん」

と頭を下げる。

うん、なのちゃんは礼儀正しいね。

「ウチは関西呪術協会及び関東魔術協会両報告官、流派京都神明流が青山刹那。9才だ。木乃香とは幼馴染で、ぬらりひょんの爺さんに念のため護衛を頼まれている」

なっとか言いそうな顔で固まってる。

「貴様！京都神明流宗家を語るつもりか！」

「いやいや、宗家は従姉妹（素子と鶴子）だし。流派に宗家はつけなかったろ、にしても苗字で怒鳴る人も久しぶりだよ。まぁ姓に関しては母上に言ってほしい。鳥種と結婚して、相手に姓がないからって変えちゃダメなんて決まりないんだから」

「ほぇ？鳥種ってなに？」

「あれ？言ってなかったっけ？父上は所謂（いわゆる）烏天狗って種族なんだ、普段は変身してるから人にしか見えないけど」

「じゃあ、せつなクンにも桜咲さんみたいに羽があるの？」

「あるよ。折角だし見てみる？」

「うん！」×2

と、何故か木乃香まで頷く始末。お前は見たことあるだろうが。

シャツを脱いで白い翼を展開そして広げる。

久しぶりの開放感が堪らないが、掃除が面倒そうだ。

「ふぇぇキレイ」

「な、なな。何故貴様は戸惑いもせずに見せる事ができる！？」

「嫌われないのがわかってるから」

桜咲が悔しそうに下唇を噛む。

「あ、せっちゃん(桜咲)。だめよ」

「ねぇせつなクン、触っていい？」

なのちゃんがほそぼそと聞いてくるのを笑顔で頷く。

「いいよ。でも引っ張らないでね」

頷いて羽に優しく触れるのを眺めながら、木乃香に言う。

「木乃香、ウチの呼び方を「せっちゃん」から変えないか？二人とも同じじゃどっちを呼んだのか判らないし、そろそろちゃん付けは恥ずかしい」

「む～じゃあ刹那ってよぶな～」

「う、うううん。ここは？」

フェイトが目を覚ましたので、羽を納めシャツを着て声をかける。

「大丈夫？砲撃に巻き込んじゃってゴメンな」

「ゴメンなさいなの、飛び出してくるとは思わなくて」

「傷は治したから平気やと思うけど、痛いとこない？」

介入者(フェイト)が目をパチパチさせて、こちらを見る。

「あの、ここは？」

「ウチの家だよ、森の中じゃしっかり寝かす事も出来なかったし連れてきたんだ」

続けて、できるだけ穏やかに聞く。

「問題がなかったらどうしてジュエルシードを集めてるか教えてもらっていい？事によっては手伝えるよ」

頭を優しく触れる。

触れた瞬間に払おうとしたけど、力が入らなかったのか、腕を掴む。

掴むといっても、持ち上げた手を支えるぐらいしか力が入っていない。

その掴んだ手を取り、手を重ねる。

「ここは安全だし、大丈夫だよ。キミをイジメたりもしないから」

ここで、く～っと可愛い音がなる。

フェイトが頬を染めて俯くのを見て、笑みを浮かべながら言う。

「ゴハン作ってくるから、ちょっと待ってて」

フェイトをなのちゃん達に任せて、戦場（台所）に向かう。

目指すは少女達の笑顔（美味しい御飯）！！

第08話　Ｉ　Ｗａｎｎａ　Ｂｅ　Ｙｏｕｒ　Ｗｏｒｌｄ（後書き）

黒「次回は番外編と言うか、本編とは直接は関係のない話です」

刹「何でなんだ？」

黒「第０？話だからだ！わからない人は？でググれｗｗ」

な「お話は中断するの？」

黒「いや、時系列的にも繋がってるし何事もなく話を続けるよ」

木「なんで番外編なんや？」

黒「こういう番外編にしか出てこれないキャラが出てくるからね、と言うわけで参上してもらいましょう。どうぞ！」

士郎「鳴海のブラウニーこと衛宮士郎です」

イリヤ「冬の聖女ことイリヤスフィール・フォン・衛宮・アインツベルンよ」

フ「長い名前・・・」

イ「お爺様にアインツベルンの姓は残して欲しいって言われてね、私だけ着ける事になったのよ、貴女達は可愛いからイリヤでいいわよ」

＊貴族を愛称で呼ぶのは親しい者だけで許可なく呼ぶのは裁判沙汰

になるぐらい怖い事である

木「士郎にぃとイリヤねぇの事やったんか」

イ「久しぶりね、木乃香ちゃん。刹那とは仲良くなれてる？」

木「バッチしや」

黒「ナニコノ娘コワイ。何も進んでないのにはっきり言うなんて」

刹「いつもの事だろ、気にしなければいいだろうに」

黒「周りから塗り固められているのに何を平然としてるんだ、黒化ルートに行ったらどうする？しかも言われた人や詠春も敵にまわるんだぞ」

刹「ナニソレコワイ」

な「木乃香ちゃん、嘘バッカリ言ッテルト白イ悪魔ニ襲ワレルヨ」

黒「ＭＳが出て来た方がよかったと思える状況が怖いな、オレは逃げるから次回予告よろしく」

刹「は～仕方ないな」

木「貴女に見えるもの、偽りの居場所」

な「そこに見えるのは期待の眼差し」

フ「私に見えるのは繰り返す悲しみ」

刹「魔法少年マジカルせつな
The Movie 1st編 チャプター12・5
unlimited Cooking works」

第0?話　unlimited　Cooking　works（前書き）

今回は番外編ですので本筋とは関係ないので、読み飛ばしても問題ありません。

第0?話　unlimited　Cooking　works

「素に砂糖と塩。　礎に酢と契約の醤油。
祖には我が秘伝の味噌。燃え立つ火には鍋を。
四方の門は開け、食材より出で、美食に至る三叉路は循環せよ」
「はらを(みたせ)。はらを(みたせ)。はらを(みたせ)。はらを(みたせ)。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」
「――――――Anfang(セット)」
「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が食事は汝の包丁に。
食物の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
「誓いを此処に。
我は常世総ての食育と成る者、
我は常世総ての暴食を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
食事の輪より来たれ、食堂の守り手よ――――！」
「なぁ、緊急事態だから材料持って急いで来てくれって言ったから
急いだのになに遊んでるんだ・・・」
視線が痛いぜ。

「そこは『開口一番でそれか。これはまた、とんでもないマスターに引き当てられたものだ』とか言ってほしいな」

さて、目の前にいるのは数少ない男友達のブラウニーこと衛宮士郎と面白そうだからと言ってついて来た冬の聖女ことイリヤスフィール・衛宮・アインツベルン。

いや、学校でもなのちゃんと木乃香が一緒にいる。
なのちゃんが一緒と言う事はすずかとバーニングも一緒になる。
学校の４大美少女と一緒に行動して居たら、必然的に少なくなってしまった。

「それで何を作るんだ？」

「とりあえず、イリヤさんはなのちゃん達と遊んでいてください。あと、預かっている娘もいますけど、人見知りなので気をつけてください」

「はいは～い、なのはちゃん達”で”遊んで待っておけばいいのね」

とキッチンを出て行く聖女。
もちろんスルーだよ、絡まれたら作る時間が無くなっちゃうし。

「作るのはオールマイティにバランスのいい食事だね。好みが判らないから、メインを各種ソースにしていろんな物をつけて食べる様にしてみようか。幸いソースは冷凍したのが各種揃ってるから」

「了解、何から始めればいい？」

「子供に人気の高いハンバーグと揚げ物、バランス合わせにサラダ。スープはコンソメでどのソースで食べても合う様に気を付けながら味付けかな」

その内容に士郎が一回頷き、下拵えを全部終わらせてから、一気に焼いたり揚げたりする事になる。

その間、手は空いてなくとも口は空いているのであれこれと話をする。

「そういえば、高町美由紀ってクラスメイトだよね」

「たしかなのはちゃんの姉？だっけ、どうかしたのか？」

少しだけ悩む振りをして、続きを言う。

「少し前に話に上がったから、絶讃しといたからデートの一つでも誘われなかったかと思って」

士郎のハンバーグを捏ねている手がそのままの状態で止まる。

「もしかして、買物に誘われたけどよくわからないから友達と行けば？と返したか」

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・

そして時は動き出す

すごい勢いでこちらを振り向き声を荒げる。

「いやいやいや、そんな事を言う意味がわからないぞ」

「家事が普通にできて、料理はセミプロレベル、バイクに構造が難しくない家電も修理でき、ＤＩＹはお手の物。眼も良く戦闘訓練すれば２流の奴には負けない迄はいける。これだけ条件が揃ってればデートに誘う人の他に４人や５人は必ずいる」

こちらを向いていた顔が『ギギギッ』と音を発てる様な感じでハンバーグに向き合いなおす。

だが、こんな面白いネタを逃がしはしない！

「桜さん、　凛さん、　バゼットさん」

「グハッ・・・・

別にお前を倒してしまっても良いのだろうか」

「ふん、貴様に倒せるの者などいない。ゆえに想像しろ、最強の自分を」

２人して手を動かしながら馬鹿を言い合っていたら、後ろから声をかけられた。

「何、してるの？」

２人して振り向くとそこには美由紀さんが呆れ顔で立っている。

「馬鹿な掛け合い？」

「どちらかと言うと阿呆じゃないか？」

ハァっと溜息をつかれる。

「男の子っていつもそんなやりとりをしてるの？」

「「コイツとぐらいだな、こんなのは」」

まぁ、そんな事は置いといて。

「美由紀さんはどうしたの？こんな時間に」

「なのはの着替えを持ってきたのよ、急に泊まりにしたから。刹那、お父さんがチョット怒ってたよ」

「桃子さんはどうだった？」

「大丈夫みたいだから安心していいよ。でも、ここ最近の帰りが遅いのは心配してるから帰る時間には気を付けるんだよ」

頷きながら、柔和な微笑みで返事を返す。

「ありがと、心配かけてごめんなさい。お詫びに丘の上遊園地のフリーパスと虫除けに衛宮をつけて」

「はいはい。衛宮君は次の日曜日は空いてる？空いてるなら行こっか」

「空いてるけど、なんでオレなんだ？高町ならモテるから相手なんていくらでもいるだろ」

2人(刹那と美由紀)して溜息をつく。

そして簡単に説明をする。

「モテ(キザで)るけど好(嫌いな)みじゃない人(ワカメ)と誰(言う事を)にでも優(何でも)しくて好意(聞いてくれる)に値する人(ブラウニー)どっちがいいかなんて簡単な話でしょ」

「うんうん、それに衛宮君の物言いは選んだ娘に失礼だよ」

「ああーもうわかったから、十字砲火はやめてくれ」

うむ、と頷く。

ちょうど準備の方も終わり、後は焼くだけ揚げるだけになったのでなのちゃん達を美由紀さんに呼んできてもらう。

「ちゃんと行けよｗｗ」

衛宮に釘を刺した後、楽しい食事の時間となった。

後日、桃子さんに女の子(フェイト)の気持ちを弄ばない様に深く釘を刺されたのは別のお話

第0?話　ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　Ｃｏｏｋｉｎｇ　ｗｏｒｋｓ（後書き）

タイガー「ようこそ、タイガー道場へ。私は師範代のタイガーだ！」

ロリブルマ「弟子のロリブルマだ！」

タイガー「ここでは選択肢を間違えて無駄死にしたヤツを救済してやろうというありがたい場所だ！」

ロリブルマ「なんかいつもと場所が違うね」

タイガー「この世界にはいつも使ってる場所がなかったからな！知江留に借りた教室だ！」

ロリブルマ「あ、師匠、早速一人きたよ」

ワカメ「な、なんだココは！？生徒会長がチビでブルマになってるだと！？」

ロリブルマ「やっちゃえバーサーＣａｒ」

バーサーＣａｒ「■■■■　■■■　■■」

ワカメ「ヒデブッ」

ロリブルマ「ふぅ悪は滅びた」

ガラガラガラっとドアを開けて入ってくる少女Ａ

？？？？「救済場所とはここですか！」

タイガー「む？次の者が来たみたいだな」

？？？？「私を本編に存在する人間にしてください！」

タイガー「ならばこの虎聖杯に願うがいい」

？？？？「おお、これで番外編に出れる」

剣士獅子「待っててくれシ・・・なんだこの姿は？こんな姿じゃ何もできないじゃないか！！」

キーンコーン　カーンコーン

タイガー「おぉ予鈴だ！私は授業をしなければならないのでさらばだ！」

ロリブルマ「生徒会長として授業に送れるわけにはいかないわ、じゃーねー」

剣士獅子「私の出番・・・・」

第１０話　痛いよ（前書き）

という訳で本編再開。
因みに本編に出れない人は帰宅中です。

第１０話　痛いよ

ゴハンも食べ終わったし、そろそろ本題に入りますか。

「まずは自己紹介から、ウチはこの辺り一帯の土地を魔術、ミッドチルダ的にも言うなら魔法絡みで管理している一族で、青山刹那って言います」

介入者（フェイト）が驚くが、それを無視してなのちゃんに自己紹介を続けさせる。

「あたし、高町なのは、９歳。イロイロ教えて欲しいな」

「ウチは近衛木乃香や、ヨロシクな～」

「私はフェイト・テスタロッサ・・この世界って管理外世界だよね。管理局がいるの？」

「ちょっと説明が足りなかったね。管理局とは関係ないよ、ウチの家系はこの世界の魔術管理団体から委託されてるから。だから、正直に話してもらえたらあげるのは難しいけどジュエルシードを貸すぐらいならできるから」

「ちょっと、勝手に貸すとか言わないでください！すごい危険な物なんですよ」

とユーノが口を挟むが、押さえつける。

「じゃあ、ジュエルシードをこの世界にばら撒いてしまった責任、

金銭で補填できるのか？賠償金が２１個に各５０万で１０５０万に暴走の封印代が単体での暴走なら一つ５０万、複数同時なら個数の３倍掛け、それに建築物等の被害に対する賠償。現在の合計が約３０００万円を個人でも一族でもいいが早期支払いができるのか？できないだろ。できる迄はこちらの所有品扱いさせてもらう」

実際には、研究とそれに必要な情報とかでかなりの減額がされるだろうけど今は言わなくていい事だ。

まぁ、プレシアとの協力を漕ぎ着けて減額も最小限で済ませ、フェイトとも戦わなくて済み、ジュエルシードも複数個確保。

という感じにホクホクを目指すか。

「言っても仕方ない」

「なんで、言っても仕方ないんや？言ってくれへんとわからへんよ」

と木乃香のアシストが入ったのでそれを追う。

「話してもらえないとぶつかる事になる。けど、話してくれるだけで味方になれるから、話して欲しいな」

言い終わってから、見渡すとなのちゃんがうずうずしている。

「それに、ウチらの中で一番の頑固者が決定してるから諦めた方がいいよ」

ウチの言葉になのちゃんが続ける。

「友達に・・・なりたいんだ」

フェイトが驚くが、すぐに悲しげな顔を覗かせ呟く。

「だめ、私には決めれない」

ウチとしては『待ってました』な言葉がやっと出て来た。
前世の知識で知ってはいたけど、普通に考えて小学生の歳でジュエルシードなんて集めないからね。

「じゃあ、決めれる人の事を教えて」

「え、母さんの事？」

その言葉に反応したのは桜咲さんで、険しい表情で聞き出す。

「母に頼まれたのですか？どうして頼まれたのか教えてください」

その事が気になった。
木乃香の前世にいたウチらしいが、こちらやウチの前世と同じなら両親は健在で、厳しくも優しい筈だ。
多少顰(しか)めはしてもそこまで表情を崩すとは思えない。
そこで知っている人に念話で聞く。

（木乃香、桜咲さんって親と何かあったの？）

（里子でウチの家に来とったけど詳しい事はしぃへん）

どうやら事情が違うらしいが・・
今、気にすべきはフェイトだから、後回しにする。

「話しにくかったら取り次いでくれるだけでいいよ？」

桜咲さんの言葉に悩んでいたフェイトにこちらに不利にならない逃げ道も用意する。

その言葉に顔を振り、ポツポツと語り出した。

昔は優しかったプリシアが冷たくなり

徐々に厳しくなって・・

お仕置(体罰)きをするようになり、

そして、ジュエルシードを集めるように先月、言われたそうだ。

理由も『研究の為』としか言わず、下手に聞けばお仕置(体罰)きされるそうで聞きなかったと。

途中から涙を溜めながら話すその姿は悲壮を語り、なのちゃんと木乃香も涙を誘われていた。

「フェイトちゃん。辛かった？これからはウチらが一緒にいるから辛い事があったら何でも言って」

言葉と共に髪を撫ぜてあげる。

「護るから一緒にいさせてや」

木乃香が抱き着きながら言葉をかけ、なのちゃんが手を握り締める。

そうして、フェイトから溜めていた涙が溢れ、嗚咽が零れた。

「幸せになってほしいんだ」

ひと呼吸置いて、撫ぜている手に優しく力を込め言葉を続ける。

「辛い事があった人ほど、幸せになってほしいと願っちゃうんだウチは」

第１０話　痛いよ（後書き）

黒「うん、ネタが思いつかない。カンフル剤が足りない」

刹「どうした？普段長いのを書かないからいつもの三日坊主モドキが発動しそうなのか？」

な「黒くんって三日坊主のこと、多いの？」

刹「多い、と言うか一月程は続くんだが、それを越して一つのストーリーを書き続けるのが苦手なんだよな」

黒「それぐらい書いてると頭の中にｉｆＶｅｒの話しが蔓延しだしてそっちを書きたくなっちゃうんだよね。今もチートなしＴＶＶｅｒを書き出したくてたまらないんだよね。そっちの構想や設定も固まりだしているし」

フ「浮気者なんだ」

黒「一応、理由もあるんだよフェイトさん」

刹「ほう、なら教えてくれ」

黒「このストーリーって映画基準じゃん」

な「そうだね」

黒「でもＡ'ｓの映画って来年（２０１２年）公開予定で、間ができちゃうからその間を埋めようと思ったんだよ。書き出すのはＢｌ

ｕ－ｒａｙで発売されてからになるだろうし」

刹「じゃあ、チートなしはＢｌｕ－ｒａｙが発売される迄にＡ'ｓ辺を書き上げるつもりなのか？」

黒「可能な限り最善を尽くしたいと思慮させていただいております」

フ「汚職した政治家みたい」

黒「逃れる為ならプライドなどそこらの狗に食わせてやる」

ア「じゃあ食べてやるよ」

黒「おふ、アルフは狼だろう。そんな物食べないでくれ。そろそろ次回予告いっとくか」

桜「貴女とお嬢様が目指すモノは正しいと思います」

刹「夢は二つと要らないよ」

木「ウチは約束する」

プ「貴様は私と話すに値しないわ」

ア「超すっごいよ、あんた」

ＫＹ「速やかにロストロギアを捕獲しよう」

第１１話　声が届くなら（前書き）

うん、迷走しだしてる気がするｏｒｚ
どうしたものか？

第１１話　声が届くなら

あの後はそこそこ話しつつアルフも来させて、フェイトも泊まり。
今日の放課後にフェイト（時の箱庭）の家に行き、プリシアとアポ（ぶっつけ本番）なし訪問で交渉する事が決まった。

正直、癇癪起こされてフェイトに八つ当たりが行きそうだから守らないといけないな～なんて授業中に考えていた。

「刹那くん、今日はぼ～っとしてたね」

すずかにそんな事を言われるとは心外だ。
まぁ、転生者であるウチは中学ぐらい迄の内容は空で答えられるから実際は問題ないけど。

「ちょっと悩み事があってね、つい考え込んじゃってたよ」

「へ～アンタが考え事なんて珍しいじゃない。何考えてたのか教えなさいよ」

そのアリサの問いに頷きながら答える。

「自分の部屋に仕掛けてる対木乃香用罠が効かなくなりだしたからどうしようかと」

あ～っと納得するすずかとアリサ、自分で言ったが冗談を納得しないでもらいたい。

「部屋にそんなんないよ、せっち（ゃ）、刹那もそんなウソいわんで～」

ちょっと怒った木乃香が訂正する。（頬を膨らませた）

「ホントは知り合った娘の家が酷いって聞いたから、何かできないかな考えてたんだよ」

「そんなの簡単じゃない」

アリサがすぐに解を言う。

「あたし達にできる事って友達になる事よ」

思わず、「ああ」っと頷く。

そんな単純な事を求めた訳じゃないけど心理に思えた。

だが、アリサに言われるとおちょくりたくなってしまい。

「確かにアリサの言う通りだ」

真面目な目で見返しながら返すと。

アリサと目が合い、3秒程でしてから顔を紅くしながら逸らした。

そんな様子を他の3人はクスクスと微笑みながら眺めていた。

昼休みの間にすずかとアリサにフェイトの事も漏らしながら、落ち着いたら紹介すると約束した。

放課後となり、フェイトと合流してフェイト（時の箱庭）の家への転移魔法を唱えてもらう。

「ほえ～スゴいところなの」

フェイト(時の箱庭)の家を見て、なのちゃんが声をあげる。

すずかやアリサの家とは別の意味で凄いから気持ちはわからないでもないけど窘める。

現実で見ると水に浮く油の膜が何重にも見える光景は異様で圧巻だ。

それよりも、目的の為に動き出す。

「行こうか。フェイトちゃん、案内お願いね」

ウチの言葉に「うん」と返事をして、フェイトが歩き出す。

門をくぐり、5分程でプリシアの部屋に着いて部屋の前で確認を取る。

「フェイトちゃんはウチを紹介してくれたら、手早く部屋を出ちゃっていいからね」

「いいの？上手くいかなくて母さんを怒らせたら、殺されちゃうかもしれないのに」

フェイトがウチを気遣ってくれたけど、顔を振り断る。

「大丈夫だよ、ウチは両親に交渉のイロハも習ってるから。今回のは両方に利点があるからそんな酷い事にはならないよ」

なのちゃんが首を傾げながら口を開く。

「両方の利点って？」

ここで説明をすれば時間が掛かってココにいる事が知られているだろうプリシアを待たせてしまうので、帰ったら教えると言い、フェイトにドアを開けてもらう。

「母さん、手つ「協力」協力してくれるって人が」

プリシアは不機嫌な目でこちらを見ている。

「お初にかかります、ミセスプリシア。私はこの国の報告官で鳴海の街で起こった事に対処し報告する者で、家名を青山、名を刹那といいます」

「それで、この私に何の用？」

相も変わらず不機嫌な顔をしながら聞き返してくるが、フェイトに向き直り。

「ありがとう、先に出てなのちゃん達と一緒にいてもらっていい？」

言われ、口を少しだけ開くがウチが背中を押してドアの方にやる。

「お待たせしました。フェイトちゃんにジュエルシードを研究に使うと聞きまして、集めるのと研究を手伝わせていただく代わりにこちらの研究も手伝って頂ければ」

「私は回りくどい事は嫌いなの」

ぶっちゃけろと言いますか。

「そうですね、ウチも苦手ですから正直いいます。ウチらはジュエルシードで願いを叶える万能の釜【聖杯】を作りたいと考えています、ですがこの世界にはない物なので他の方面からの解析データも欲しいのです、そこで解析させたいと」

プリシアの不機嫌な顔が不敵な笑みに変わる。

「あらあら、私を利用したいと。大胆ね、こちらとしてはその【聖杯】という物も気になるわ」

不敵な笑みをこちらも返す。

「ウチとしてはジュエルシードを使う研究の成果が気になります」

暗にカードを切ったのだから、そっちも切れと言う。

「まだ、駒をなくす訳にはいかないのよ」

それに対して、今はフェイトに知られたくない、知られる訳にはいかないとの返事。

「つまりフェイトちゃんが話してくれた昔と今での対応の変化に繋がると」

フェイトにもらった話（チップ）を追加（ベット）する。

「貴方、何を知ってるの？」

「Fに繋がる真実を」

その言葉にプリシアの視線が殺気を帯びる。

「何故、知っているの」

「過去に生まれ変わったから」

ウチの秘密（新たなチップベットする）を言う。

「そう、では何が欲しいの？」

「アリシア（フェイト）の妹に幸せな家庭を」

「貴方にそれができるの？」

「全力を尽くす。だが、それには貴女の心と力がいる」

問答を繰り返し、プリシアが息を吐く（つく）。

顔は穏やかなモノに変わっていた。

「あの娘達を連れてきて頂戴。アリシアの場所に案内するわ」

「はい、これからお願いします」

第１１話　声が届くなら（後書き）

黒「凄い難産でした」

刹「ちなみに初期の予定と変わってるんじゃないか？」

黒「うん、プロットと言う程のモノじゃないけどざっくばらんな構想だとプリシアは拒否する予定だった」

な「どうしてこうなったの？」

黒「理由は単純。時の箱庭からの脱出方法がなかったから」

フ「刹那やなのはが言えば送るよ？」

黒「プリシアに逆らってか？その時点で萎縮して動けなくなって、プリシアからの全方位爆撃、残念な事に刹那はバリア（全方位型）タイプのプロテクションを張れない、なのはとアルフは張れるけど強度不足、木乃香に至ってはシールド（一方向型）タイプも微妙。４人でどうにかこうにか防いでも手が出せない、退却できないでオワタ＼（＾ｏ＾）／」

黒「まぁ、こんな風になっちまったのは仕方ないからプリシアには延命してもらう事に。ちょっと短いけど時間が押してるから次回予告を」

な「は～い」

な「ちょっとせつなクン、ねぇどこを見てるの？」

フ「次回　足あと」

第１２話　足あと（前書き）

祖母が介護が必要になったり、妹が結婚したり、
母が介護に時間を取られるから家業の手伝いしたり。
母方の祖母が入院→手術→２週間程手伝いに出向。
介護が必要になった祖母が入院→手術。
と激昂の２ヶ月程あり中々時間が取れなく、
更新を滞ってしまってすみません。

あと、プロットを見直したらミスした事に気付いて（フェイト捕獲は２回戦目での予定でした）
大幅な修正が必要になり頑張って元の構成に近づけるため頑張ってます。

＊１１／１２／１０前話の最後に少し追加しました。

第１２話　足あと

「みんな、どう？機器の調子は悪くない？」

その言葉に振り向かずに答える。

「はい、いい調子ですよ。今回はスクライアから報告された危険度の高いロストロギアの回収ですので、早く着ける様に巡航速度は速めですが問題なく稼働しています」

報告を繋いだのは、お茶をいれていたエイミィだ。

「依頼品のロストロギア、ジュエルシードでの次元振もないです。反応も無いので活性化はしていないようです」

その言葉を聞き、頷きながら艦長椅子に座る、リンディ・ハラオウン。

「管理外世界への放置、次元振が起こる様な物ならなおさら見過ごせないわ」

黒を基とした管理局制服を身に纏い、暗い瞳に鋭さを増しながらリンディの息子、クロノが答える。

「はい、迅速に回収しましょう」

「にして、今回の一件って変っていうか怪しいっていうか」

そのエイミィの言葉に首を傾げるクロノ。

「何か気になる事でもあったのか？」

「ロストロギアを移送してた業者なんだけど、スゴく堅実な所なの。それこそ航行中の事故なんて１０年ないのにサブエンジン（補助魔力炉）が急に暴走、爆発。その際に近くにあった貨物室に穴が空いて”ロストロギアだけ”がその世界に落ちてしまった」

「エイミィ。それは怪しいなんてもんじゃないだろ」

それに頷きながら返事をする。

「まぁ、引き上げるのも無理そうだったから他の物は船に搭載してる魔力銃で撃ち落としたけど、ロストロギアは暴走されたら大変だから放置して回収を頼んだらしいけど」

「一応、筋は通ってるわね。手引きした人間が居そうだけど」

「いなくなった人が２人いるのでその人物の探索も行われています」

それに頷き「その人物は？」とクロノが聞き返す。

「ユーノ・スクライアとカモミール・スクライア。２人とも今回の発掘に参加したスクライア族の人間で、カモミールの方は管理外世界ので犯罪歴が有るね。罪状は酷いけど」

「酷いって・・何をやらかしたんだそいつは？」

「下着ドロ……窃盗罪が留置所１週間ぐらいなのに盗りまくったせいで禁固刑２０年になった女の敵だね、クロノ君」

聞こえていた他の局員まで動きが止まった。

「それは、色んな意味で酷いな。単純に足しても千件近くしないと行かない筈なのに…いや、それよりもなんでそんなのがスクライアに居たんだ？」

エイミィが首を傾げながらだが答える。

「う～ん、状況はよくわからないんだけど、居なくなったもう一人のユーノ・スクライアが倒れていた所を助けたのが最初みたいだけど。そこからは手八丁口八丁で切り抜けていたみたい。それにユーノ・スクライアとも仲が良かったみたいで他の皆が悪い道に引き摺られないか心配してたみたいだし」

「なんにせよ、その2人は怪しいな。動機は不明だがカモミールが関わっていてもおかしくなさそうだ」

それなんだけどねっとエイミィが言葉を続ける。

「そのカモミールは女性関係、特に下着に対してだけど…それ以外では金銭にがめついスケベなだけの普通の青年だったみたい。だから2人の関与は微妙かも」

「なんにせよ事情聴取は必要ね」

第１２話　足あと（後書き）

黒「皆さん、お久しぶりです」

な「丸々２ヶ月も更新してないで何してたの？」

黒「イロイロと大変だったのですよ、前書きにも書いた通りに」

刹「それにしても、今回の話は何なんだ？わざわざアースラ側を書く必要性も感じなかったし」

カ「オレっち参戦か！ヤったぜーーーー」

黒「いや、しないよ」

カ「じゃあなんでオレっちの名前が出てくるんだよ」

黒「同じ齧歯類（淫獣）だからと字数稼ぐためにｗｗｗ」

刹「ぶっちゃけるのはどうかと思うぞ」

黒「いつになるかわからないけど、ＳｔｒｉｋｅｒＳでネギまの連中を少し出してもいいかな～とか考えちゃったら、ネタ入れぐらいしても構わんかな～と思っちゃって」

木「なんや、いつもの悪いクセやったんか」

桜「それはよかった」

黒「ま、そろそろ次回予告言っとこうか」

な「は～い」

刹「ねぇなのちゃん。ＫＹってしってる？

な「け、けーわぃ？

刹「黒尽くめの小さい青年が空気読まないで捕まえようとするんだって」

木「こわっ」

刹「しかも権力持ち」

フ「気持ち悪い」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7771w/

魔法少年マジカルせつな

2011年12月31日01時11分発行